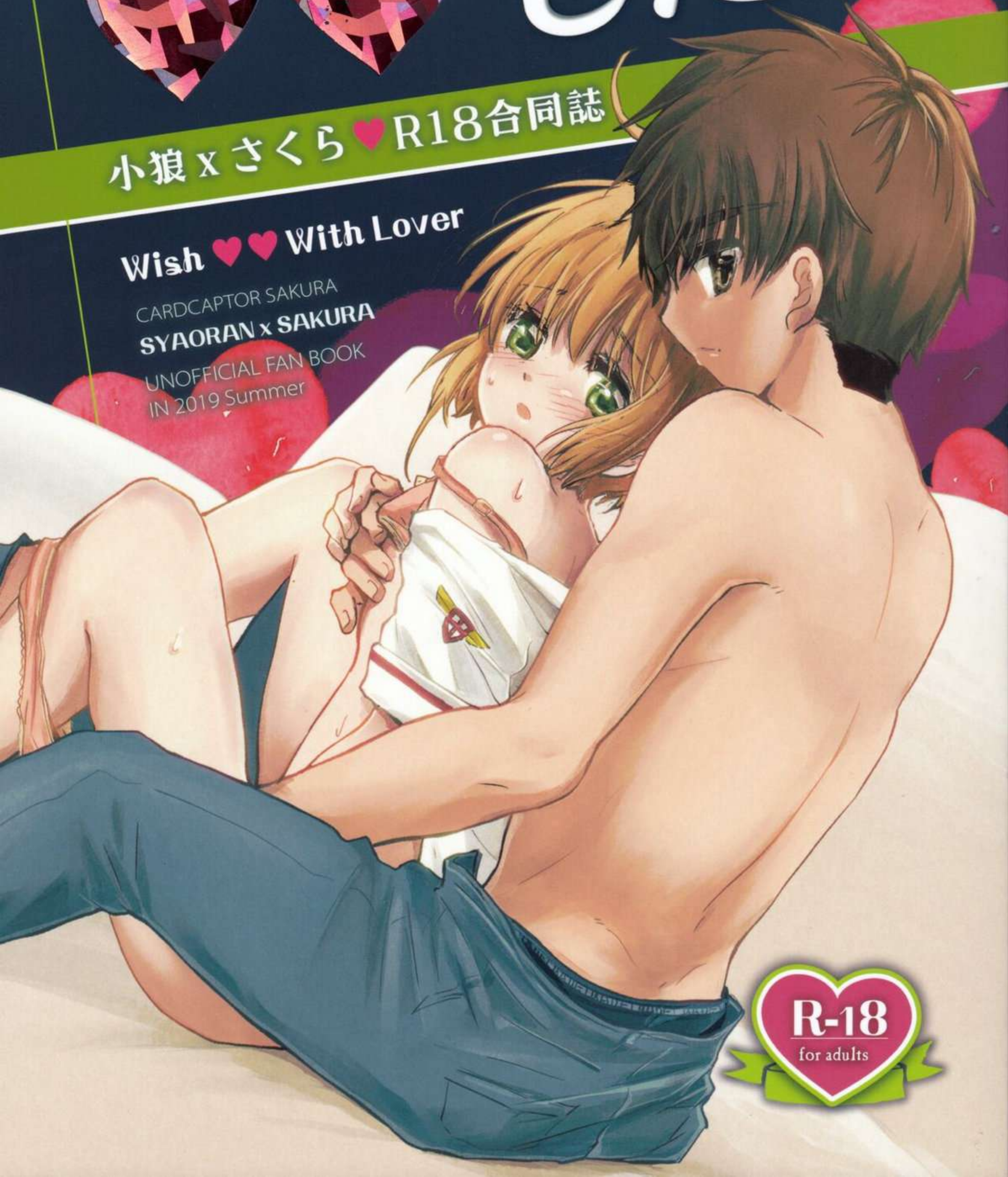


好きな人とは
したい

小狼 x さくら ♥ R18合同誌

Wish ♥♥ With Lover

CARDCAPTOR SAKURA
SYAORAN x SAKURA
UNOFFICIAL FAN BOOK
IN 2019 Summer









二つのテーマで紡ぐ

シャオラン
小狼とさくらの愛の物語

好きな人とは♡♡したい

Wish♡♡With Lover

Slow Sex

たっぷり時間をかけて

ゆっくり快感を高めて

幸と気持ちいいを分けあって

大好きなあなたと

繋がりたい

今日も明日も明後日も

ずっとくっついていよう

めいっぱいキスして愛して

快感を高めて睦み合う

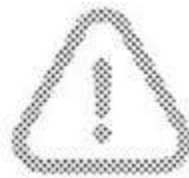
最高に気持ちいい瞬間を

君といっしょに

Polymerian Sex

目次 Content

Taking with	-----	007
Step by step	-----	039
スロウ♡スイート♡モーニング	-----	111
蜜月のしおり	-----	127



Attention

- この本は個人の作った非公式の二次創作同人誌です。
- 実在する個人・企業・団体、原作者、出版社とは無関係です。
- 無断転載・複製・複写・インターネット上への掲載
- （SNS・ネットオークション・フリマアプリ含む）は禁止です。
- 二次創作をご存じない一般の方や、関係者様の目に触れぬようご配慮願います。
- 公共の場での閲覧はご遠慮ください
- また、18歳未満の閲覧を禁じます。
- 本作品の内容（言語を改変したものも含む）を無断で電子媒体へ転載した場合、
1コマにつき3万円の支払いを了承したものとし、請求を行います。

Please do not upload to electronic media this work without permission.(Include translated comics)

When we found it,We are going to demand 30,000 JPY per panel.

Wish
♡♡
With
Love

ゆっくりなら、聞けるかな？

Talking with

ゆまこ









小狼くんが
したいことも
して欲しいことも
どっちも
知りたくて…

たくさん
おはなししながら
したいの…

ダメ…かな…?

だ、だめじゃ、
ない…

……こんなの

断れるわけ、
ないだろ



さくら
キスは好き?

ほえっ?!



あ、あのね



小狼さんと
キスするの

好き...



いや、その

しても
いいか...?

うん



...おれもだ



あ...

くち
開けて

ちゅ...
ちゅ...

ちゅ...
ちゅ...

...触っても
いいか...?

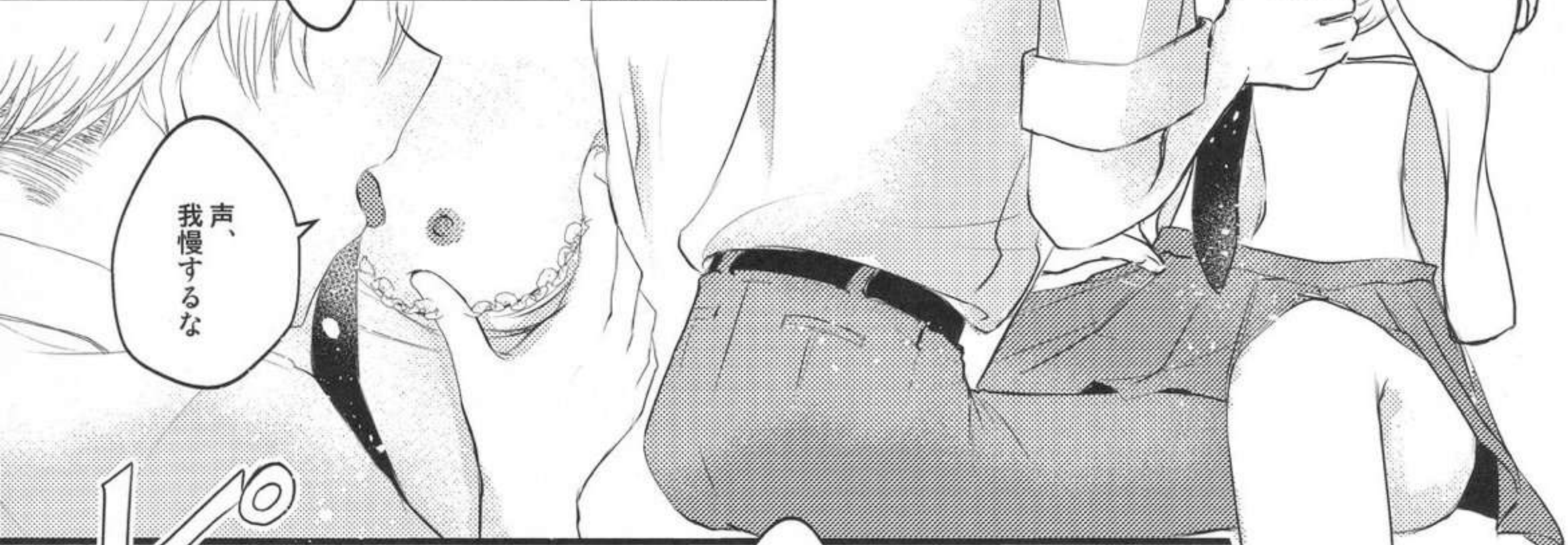
う、うん

ちゅ
ちゅ

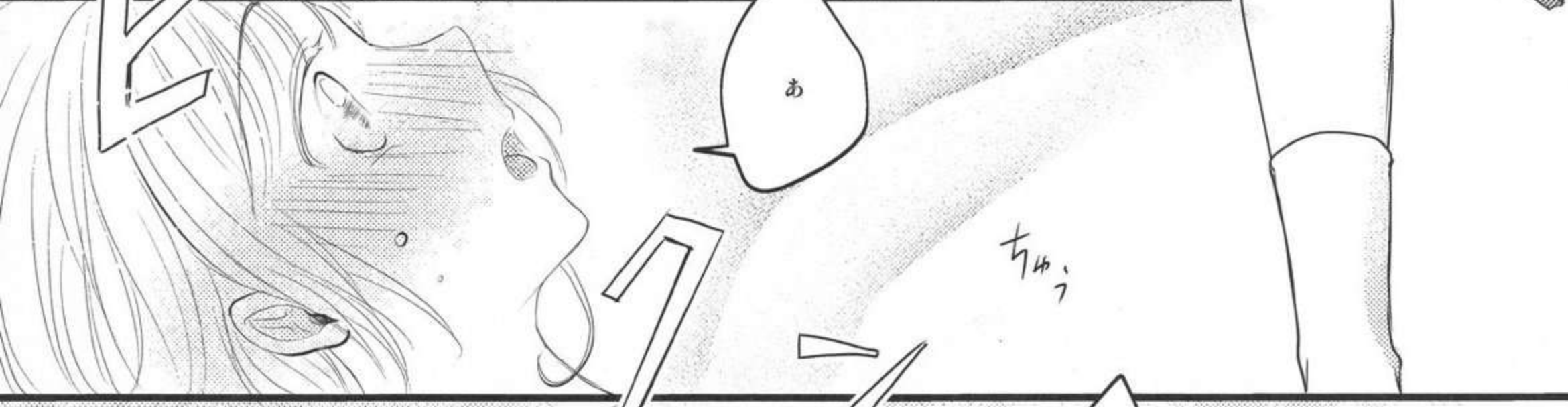




んう...



んんーっ



あ



あ、あ、あっ



はうう...

や、あ、あ!

も、
なめ、ちや、
ためえ...

しゅん

嫌いだったか?

こころするの

!?

ち
ちがうの

ききき
よすきし...

おはなし、
できないのお...

かああ

あ〜ん...



……もつと



それは逆効果だ

ほえ？



も、だめえ……

だめ、なのお



なんか

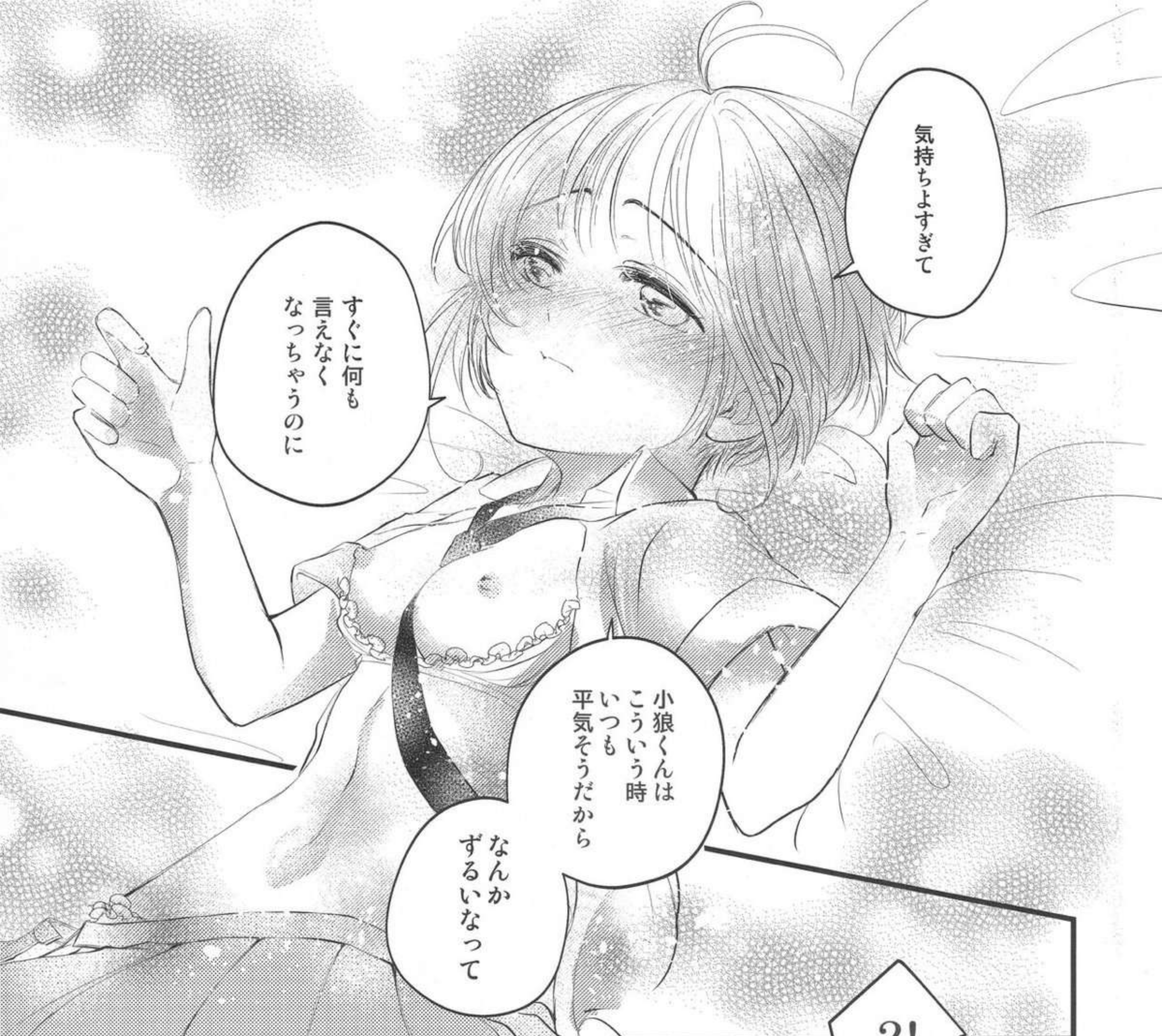
ずる...

きゅん...

小狼くんが
さわったら

いつも、
ふわふわして

胸が
ぎゅーってして



気持ちよすぎて

すぐに何も
言えなく
なっちゃうのに

小狼くんは
こういう時
いつも
平気そうだから

なんか
ずるいなって



?!

そんなこと
ない!

えっ…

その…
こうしてると

もっと
触りたくなって



小狼くんも

わたしと
一緒だった…？

ああ



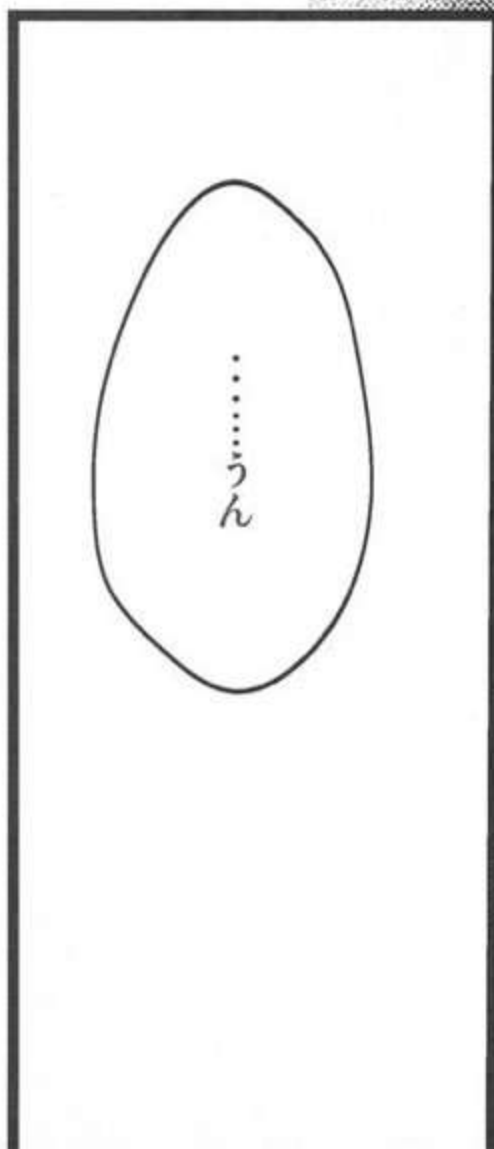
触ったらもう
さくらのことで
頭がいつぱいに
なってる

余裕なんて
ない



……うん

脱いで



……うん



全部、見たい

おれも脱ぐから



あつ...

小狼くん!
あつ...
あの、あのね

しっ、
したいこと
あるのっ

Y'' Y''

Y'' Y''



小狼くんが
いつもしてくれる
みたいに

わ、わたしも
おうちで
してみても
いいかなっ?!

なんだ?
その...



む、無理はするな

無理じゃないよおっ

?!

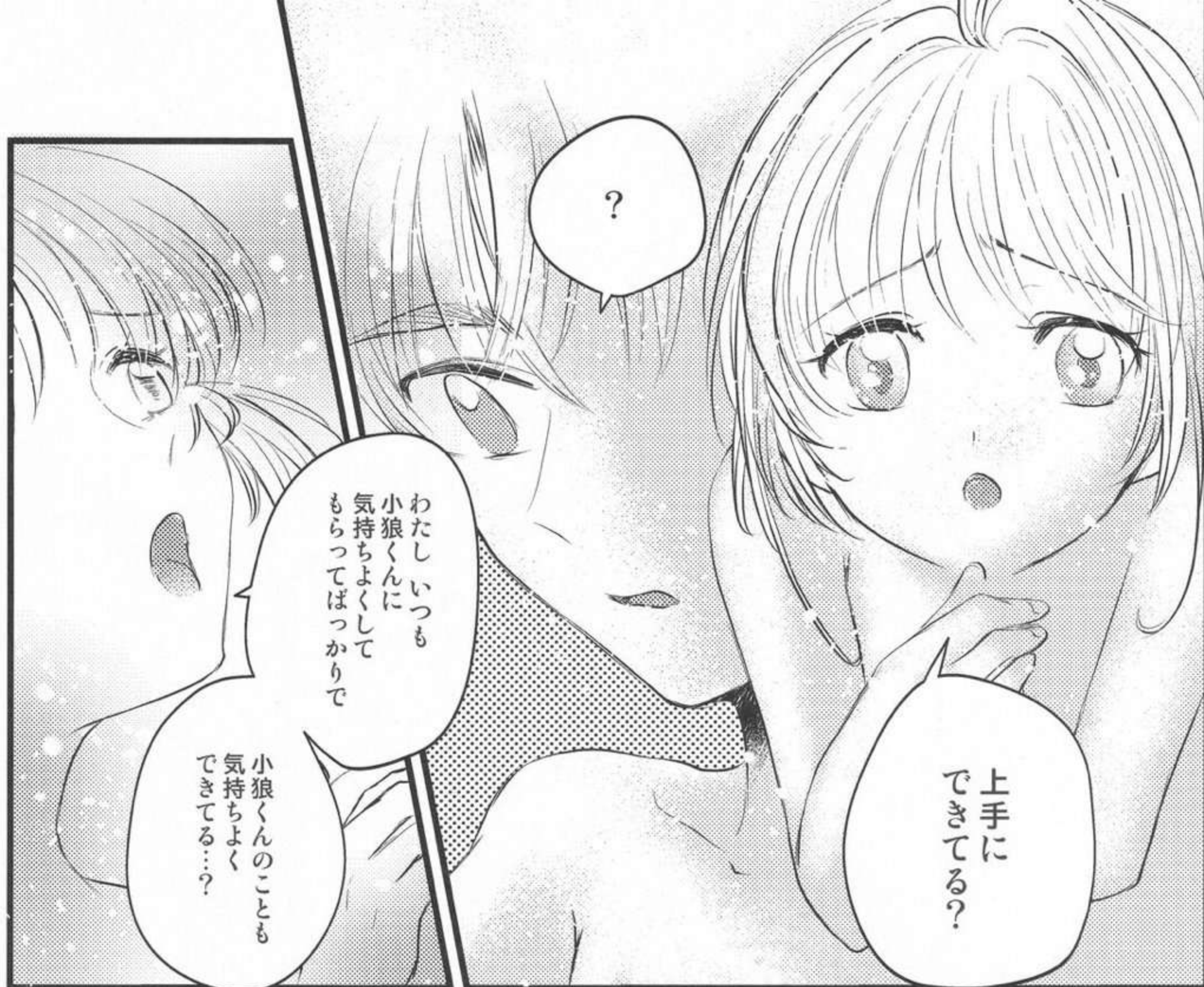


……



でもどうしたんだ、一体…

ああ、十分だ



おれには
そんなこと
でも

さくらはずっと
不安だったんだ

それで、
話をなんて

様子が
おかしかったのか…

お互い
自分の体のことは
分かってても

相手の体の
本当のところは
分からない





おれは
さくらだから

こんなに
たくさん触りたくて
抱きしめたくて

全部が欲しくて
仕方がないんだ…

！
わ、わたしも



はっ



そっ

嬉しい

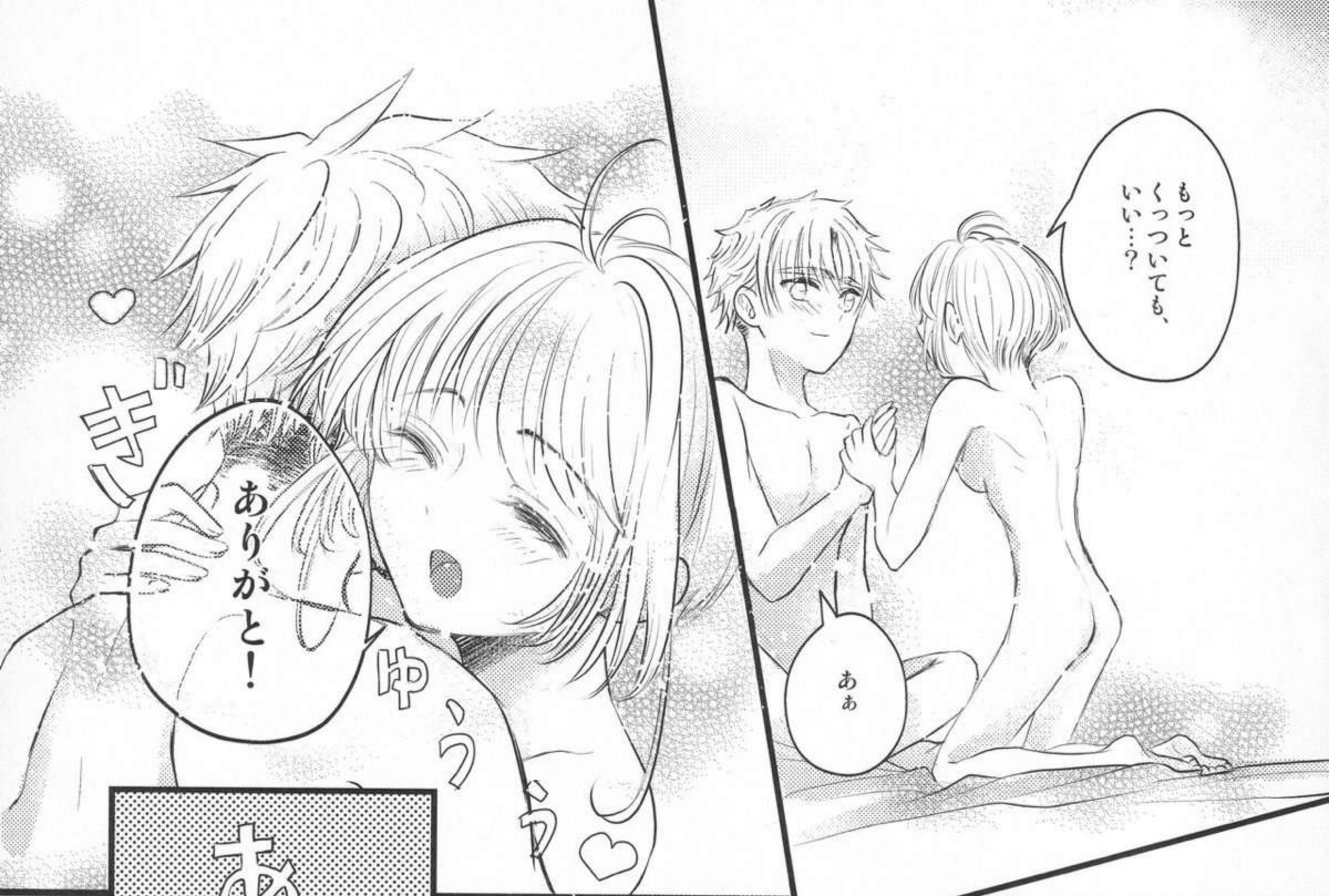


小狼くんは
触られると
あつたかくって

嬉しくて
胸の奥が
ムズムズして



でも
安心するの…





あれ？

えっ

あ〜あ〜…

いれてるだけ
なのに

あっ

あっ

やあ

ほう

やあ

どうして

う…つく…つく

も…い…つ…ち…や

あ…あ…あ…

は、







そんな
こと

うまく
できてる、なんて
考えなくて
いい、って

気に、しなくて
いいのに

さつき
言っ、くれたの
小狼くんだよ



それに、
もう…
あ、あの…

ああ…



あゝ

もう
ゆっくりなんて
できない



あー!

覚悟しろよ?!



今からたくさん
きもちよくするから



あ、

はっ

小狼くんは
いつも



わたしの
知らない
答えをくれる



ちゃんと
お話して
よかった



これは

二人だけで
できる
おはなしだから



わたし
知らなかった

こんなに
気持ちよくて
ちよつと
怖いところが
あるなんて

自分の体なのに

えへへ...

怖いか？

そうか

ううん
小狼くんなら
怖くないよ



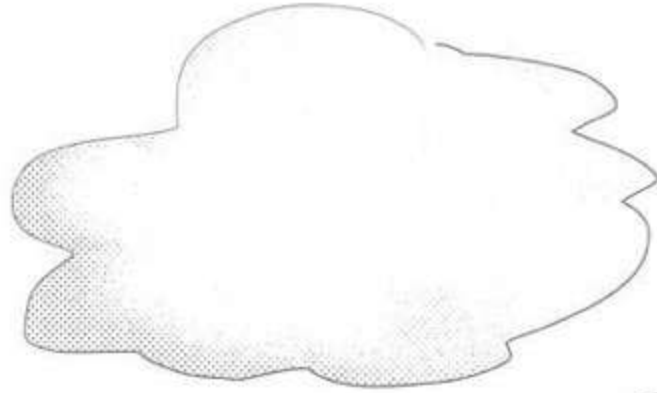
……全部
おれが
教えるから

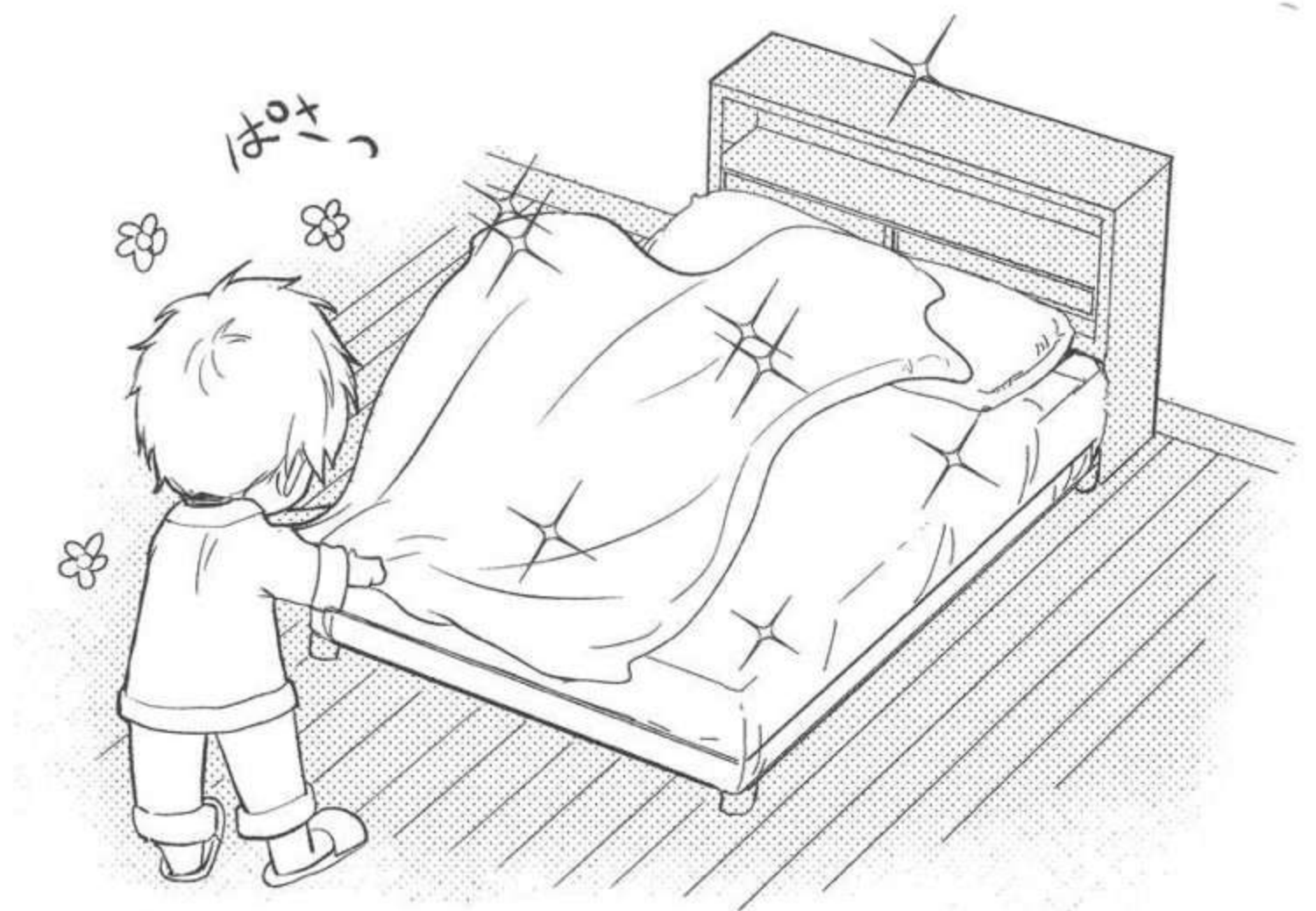
!

うん

もっと
たくさん
教えてね!

Wish
♡♡
With
Love







あ…
ああ…!!



痛い…のか
…ごめん…

やっぱり、
やめよう…か



ううん
そのまま…
来て…

小狼くんと、
一つになりたいの

小狼くん…
好き…

おへん…!!

あ

あ
あ
あ
あ
あ

初めて
さくらを抱いた時

彼女が
凶器に突き刺された
ような悲鳴を上げた

俺は一生
忘れないだろう

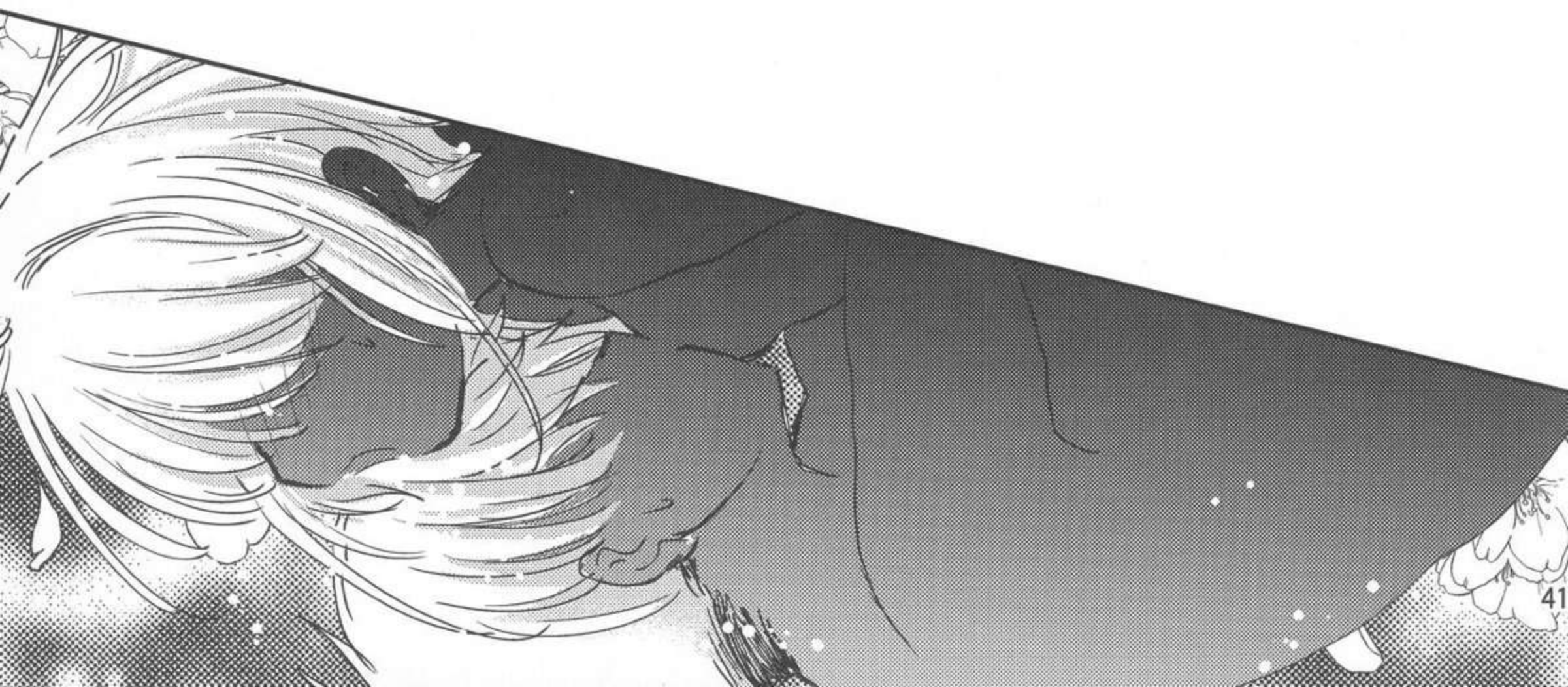
あんな痛ましい声を

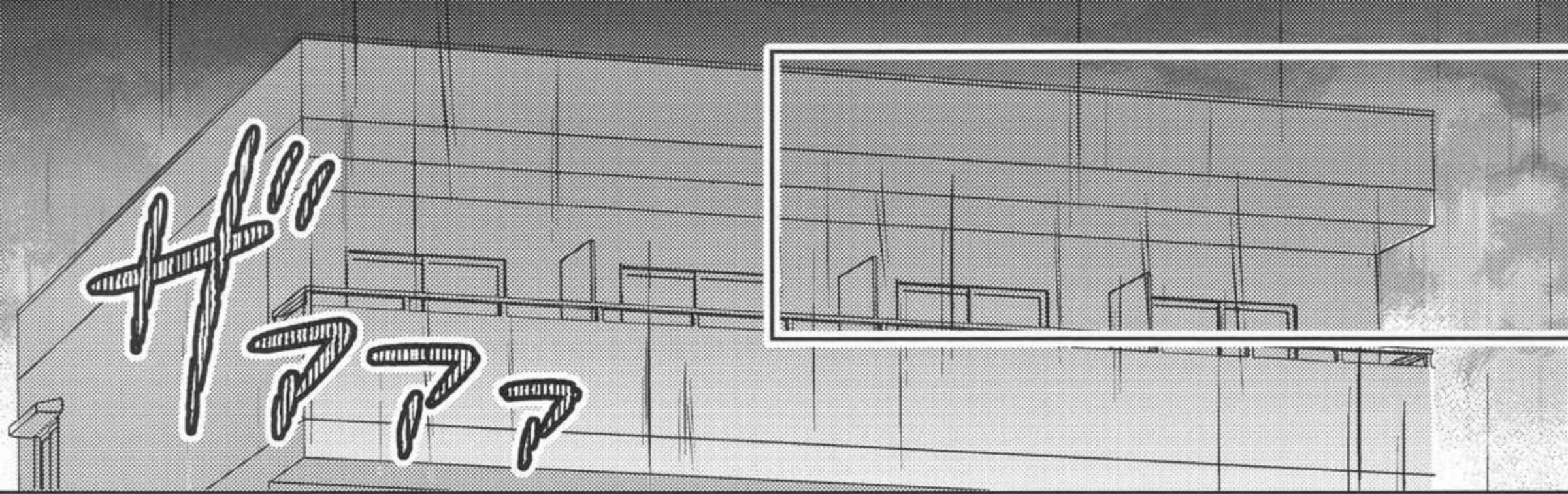


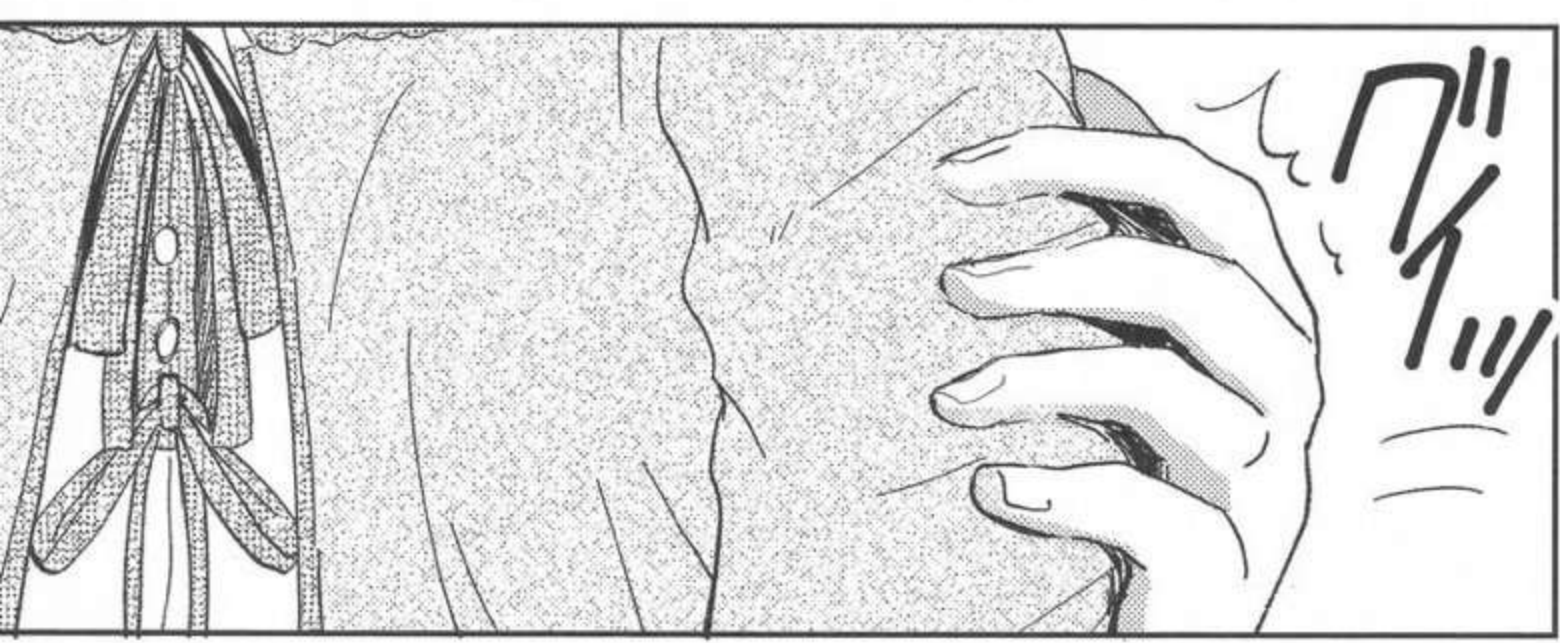
ステップ バイ ステップ

..... Step by Step
.....

かえでさご | Kaede Sago







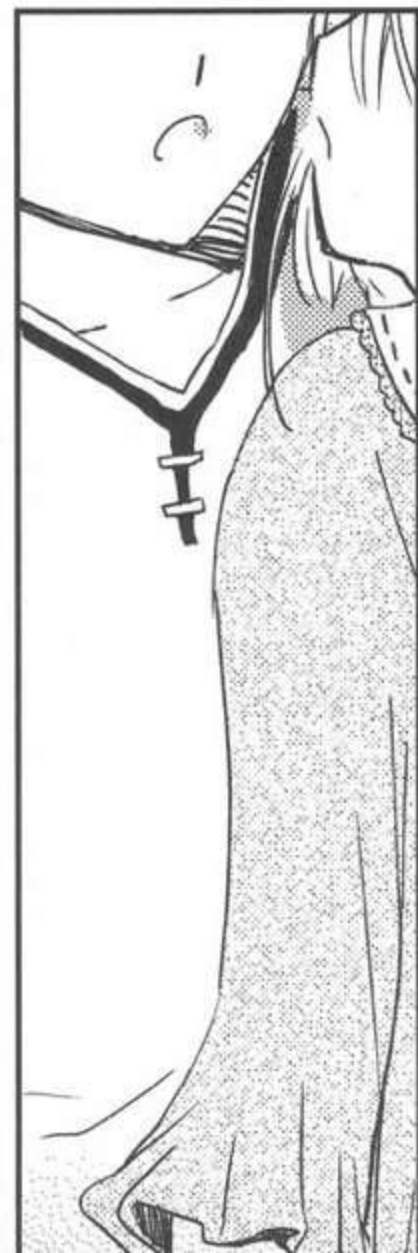


小狼くん…



ああ

さくらに
教えてやるよ
今度な







このまま
続けるよ

これから
どうなるか

俺もさくらも
よく知ってる

何回も
体験したから

…今日は
ここまでにしてよう

…もうこれ以上
無理だろう





ごめん...なさい...

...

ん

さくらが怖がってる



初めて
俺を受け入れたときから

うっ
ぐっ...

ずっと
俺から与えられる痛みを
必死に耐えてきた

そんな痛い思い
ばかりさせて
しまってるのに



それでも

や…



待って…っ
あっ
おっきいよ…

うっ



ん……!



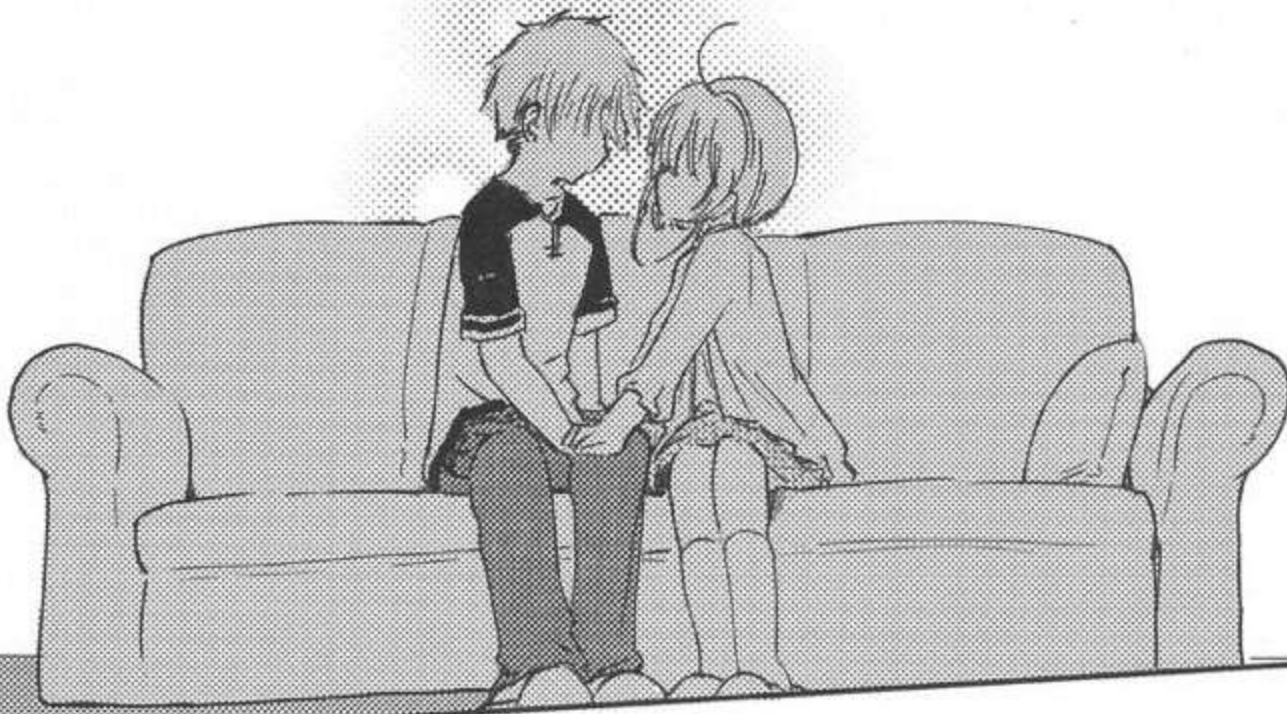
彼女が一度も
拒否しなかった

俺とのセックス





続き……
しよう？



……

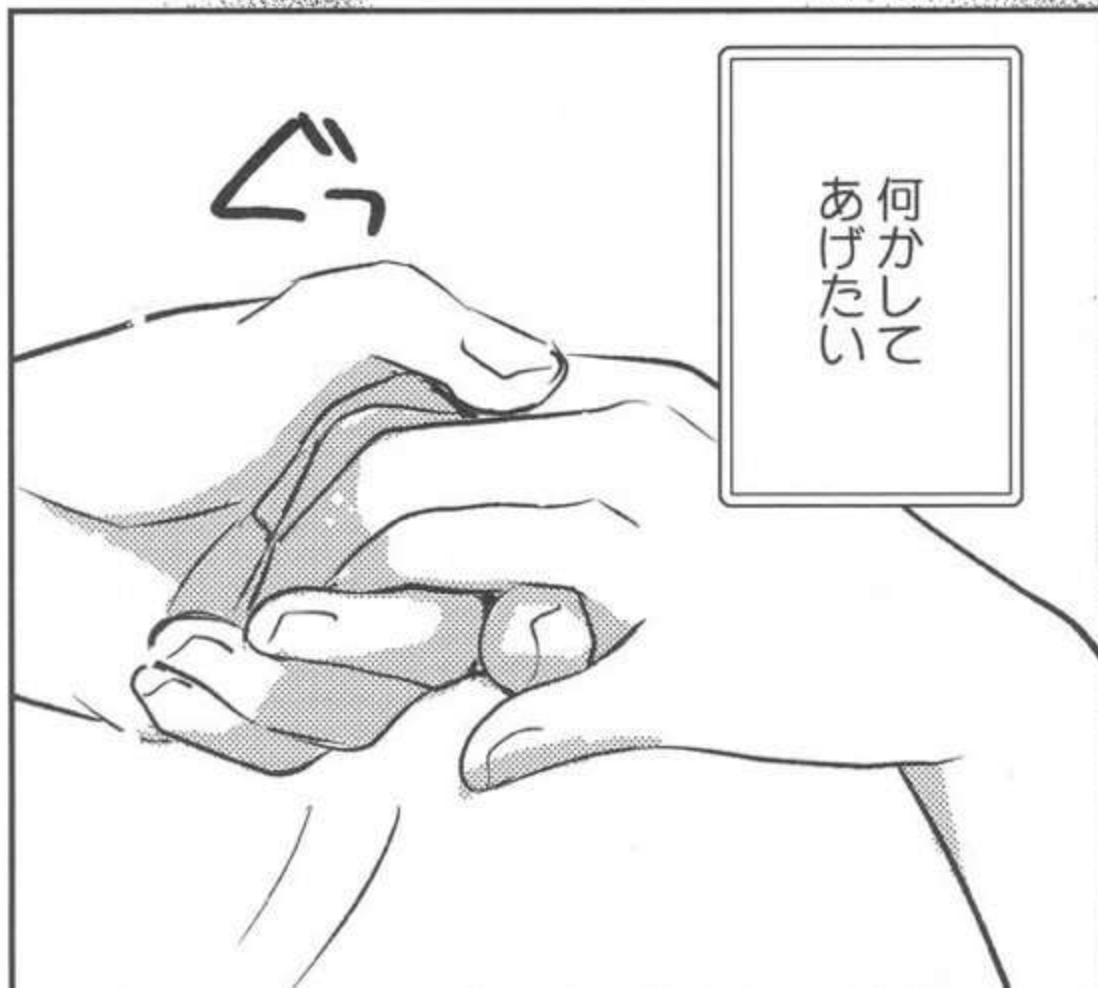




さくらが無理に
俺と体を
繋げようとしてるかも
わかってる

彼女の心と体に
痛みと恐怖を
植え付けてしまったのは

俺だ



何かして
あげたい

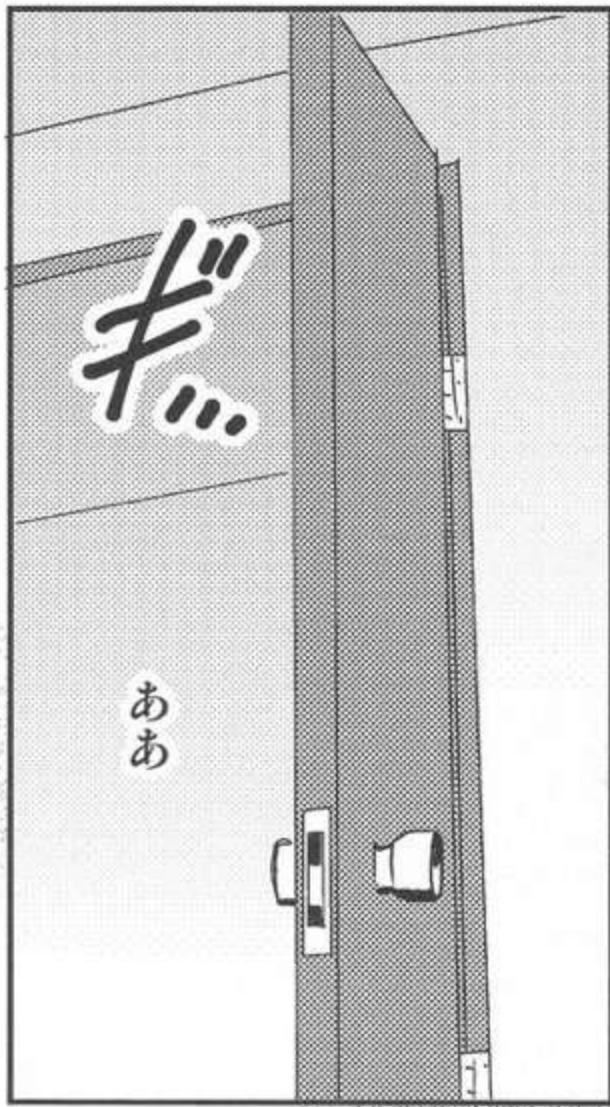


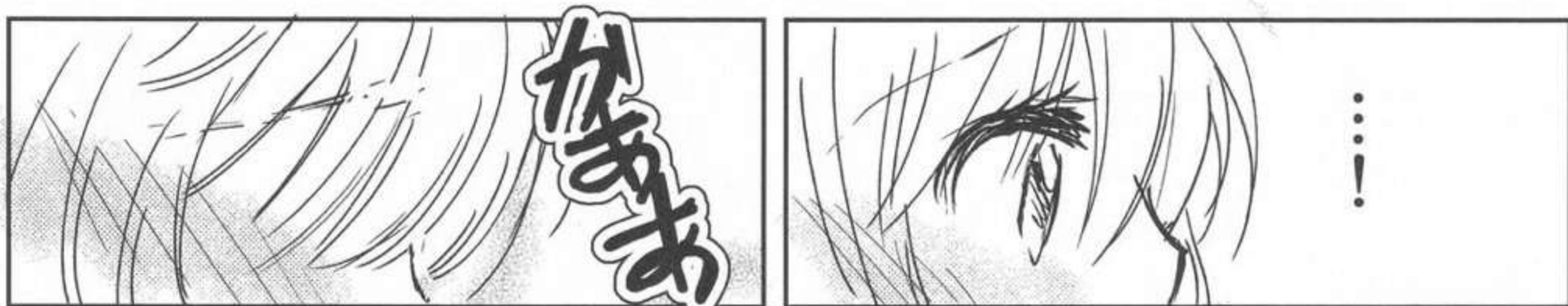
さくらを
さくらの
気持ちよく
させたいんだ

……俺も

……ゆっくり
セックスしよう

何日
かけてもいい







フルッ

クワッ

フルッ

クワッ

フルッ

クワッ

カアア

おんんんんん

おんんんんん



パンツも脱ぐの…？

ぽっ

ドクン

ドクン



…ああ

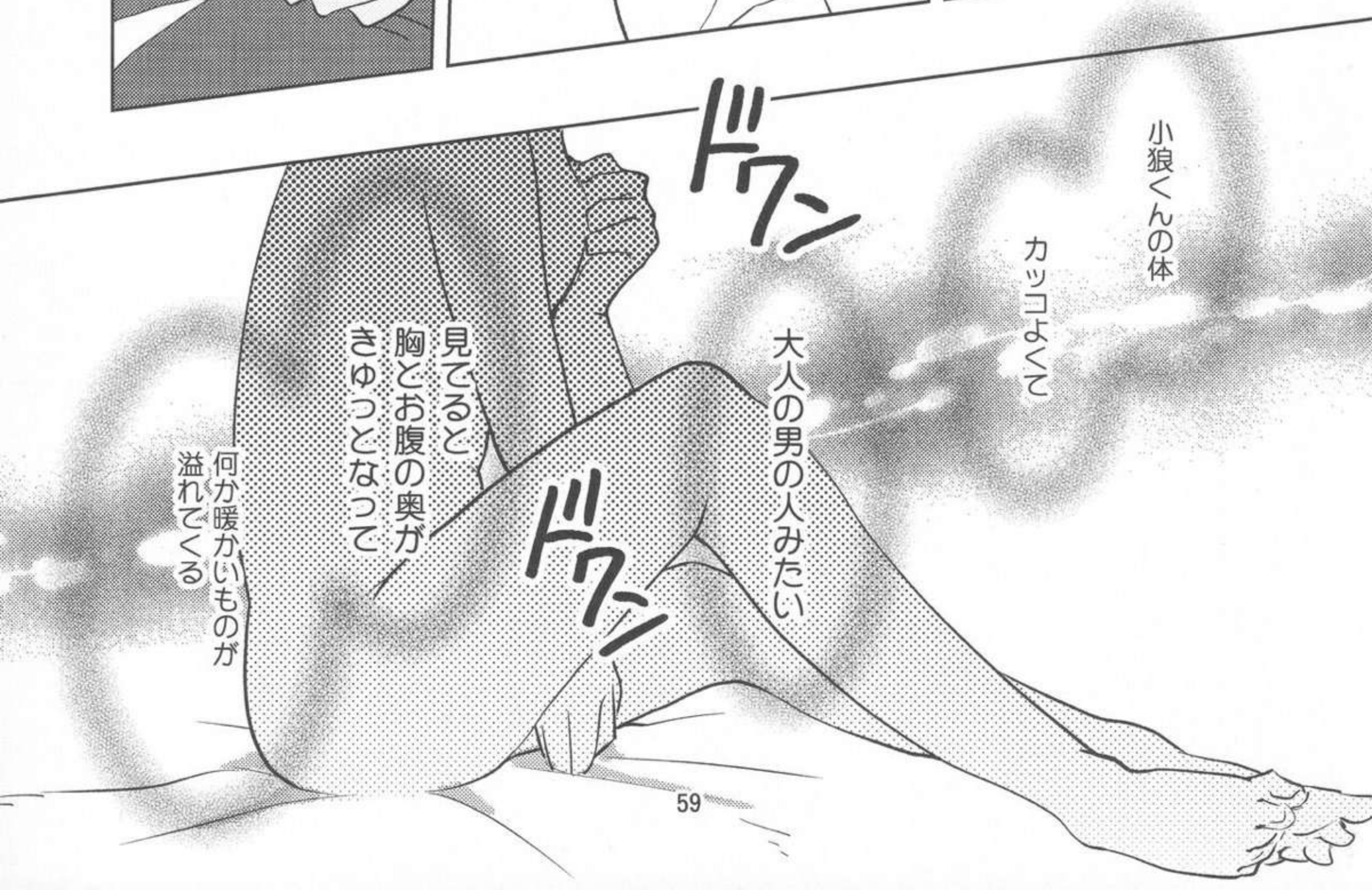
ドクン



隠さずに
脱いで欲しい

全部





小狼くんの体

カシロちゃん

大人の男の人みたい

見ると

胸とお腹の奥が
きゅっとなつて

何か暖かいものが
溢れてくる





ああ

今日は裸で
見つめ合いながら

普通にお喋り

.....
ホントに
触らない...?

それだけ

言ったのだらう...?

んんん

ドキッ

ドキッ

ドキッ

ドキッ



…じゃ
じゃあ

昨日
電話の続き
なんだけど

知世ちゃんが
園美さんからもらった
シルクで夏の洋服を
たくさん作ったの

……目が



再来週
夏の試着会を
しませんかって
私たちを誘ってくれて

思わず小狼くんの
男っぽい部分を
見つめたくなる

あれ？ 俺も
誘われたのか？

うん 是非
男性の意見も
聞きたいみたい

小狼くんの唇



小狼くんの胸

…そうか
分かった
俺も一緒に行く

でも大道寺の
作った衣装なら

言わなくても
きっと綺麗に
仕上げられるはずだ

小狼くんの手



小狼くんの――



こんなはつきり見えるのは初めてだよおお〜

俺の好み?

今回の衣装、絶対小狼くんの好みに合うから見せたいって

きゅんきゅん!!
小狼くんのアソコ



…んー
好みの衣装とか自分もよく分からないが

さくらが着てる服

俺、全部好きだ



ああ
試着会を楽しみにしてる

…ホント?
嬉しい

裸で見つめ合っておしゃべりして





心がなんだか
くすくすたぐて

キ

キ

……っ

見られてるだけなのに
体中撫でられたみたい

キ

キ

ハ

ハ

小狼くんに
触って欲しい

もじ

もじ

……と

話をしよう？



まだ
触っていないのに

やらしく
濡らして

俺の指先

ほら

ポッ...



あーん

あーん... 凄く

垂れてきたぞ



あーん...

!!

ちゅ

ちゅ

ちゅ

ちゅ



フッ

フッ



あーん... あーん

ふあ...

あう

ちゅ

ちゅ

ちゅ



ここ
柔らかい

この中がいつも
俺を温かく
包み込んでくれたから

いっぱい
お礼をしないと

こういう
マッサージは好き？

ほうっ

んっ

あっ

もみ

もみ

んんん

んんん

んんん

お腹 小狼くんの
掌に...何度も
撫で回されて...

はっ

あ...

あっ

いつも

突かれる...
ヒクヒクしてるお...



♡...♡

♡

♡

♡

♡

♡♡♡♡♡

♡

♡

♡

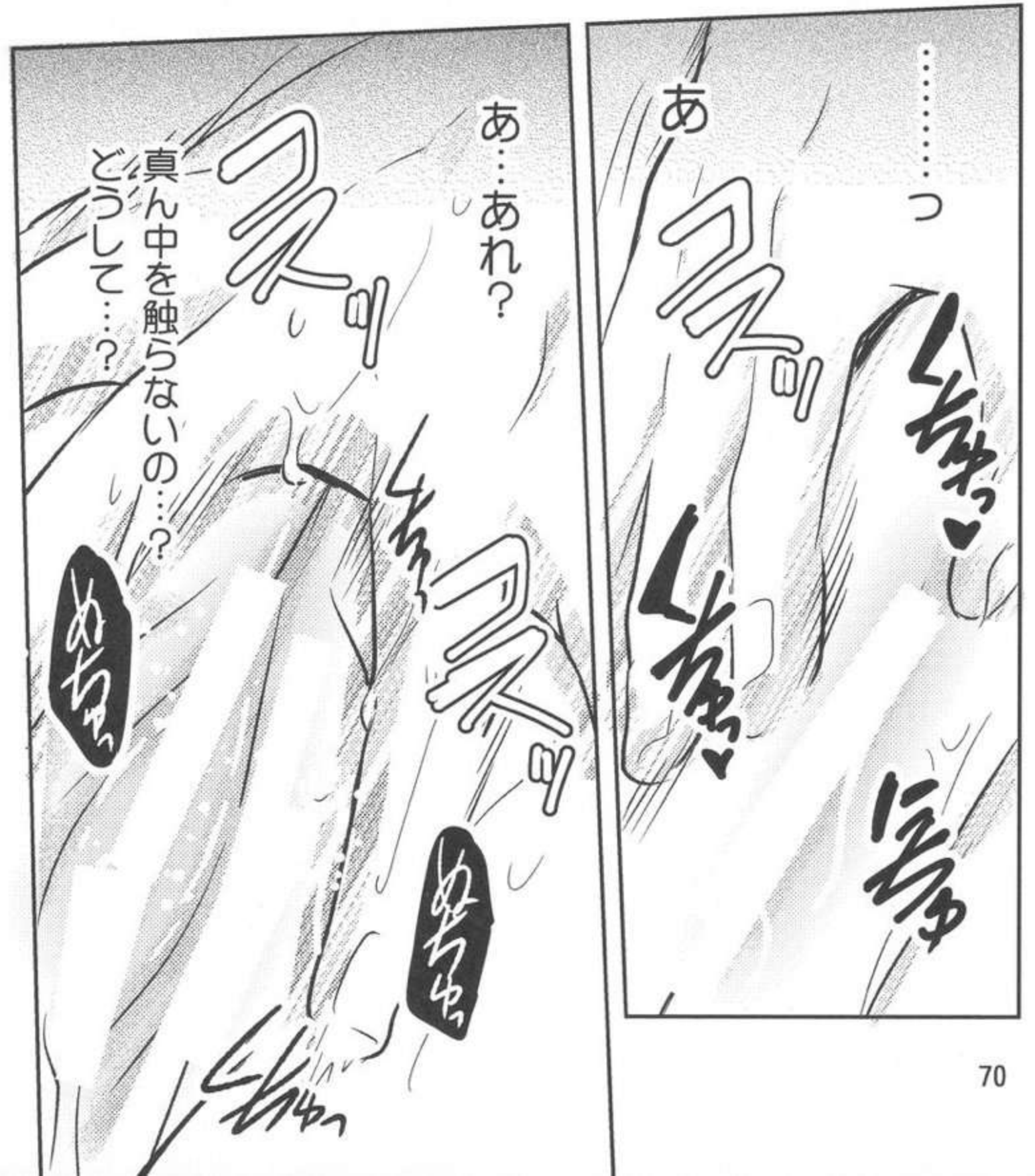
♡

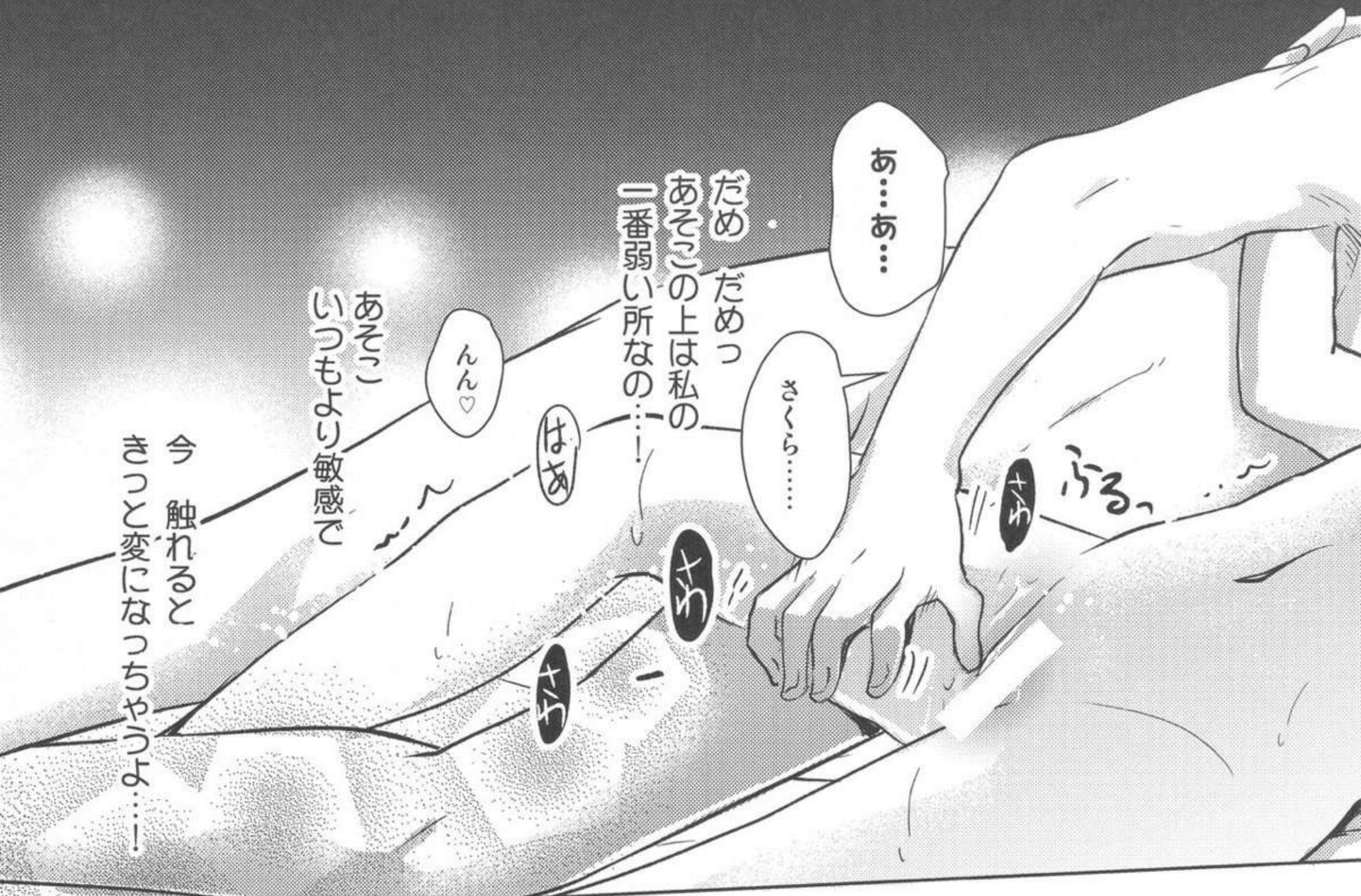
♡

♡

♡

♡





あ…あ…

あ…あ…

だめ だめっ
あそこの上は私の
一番弱い所なの…!

はあ

んん♡

あそこ
いつもより敏感で

今 触れると
きこっと変になっちゃうの…!



あっ

あ…♡

しゃお…
らん…くん…?

やだっ
こんな触り方



むずむずして
たまらなくなる…

真ん中
全然触れて
ないのに

アハハハ
アハハハ

とんたん
溢れちゃう...

やだ...
やだ...
恥ず...かしいよ

あ...っ

ス...
ス...
ス...

お腹に
指が...っ

まに...
まに...
まに...

おん...
おん...
おん...

ん...
ん...
ん...

もみ
もみ
もみ

もみ
もみ
もみ

おに
おに
おに

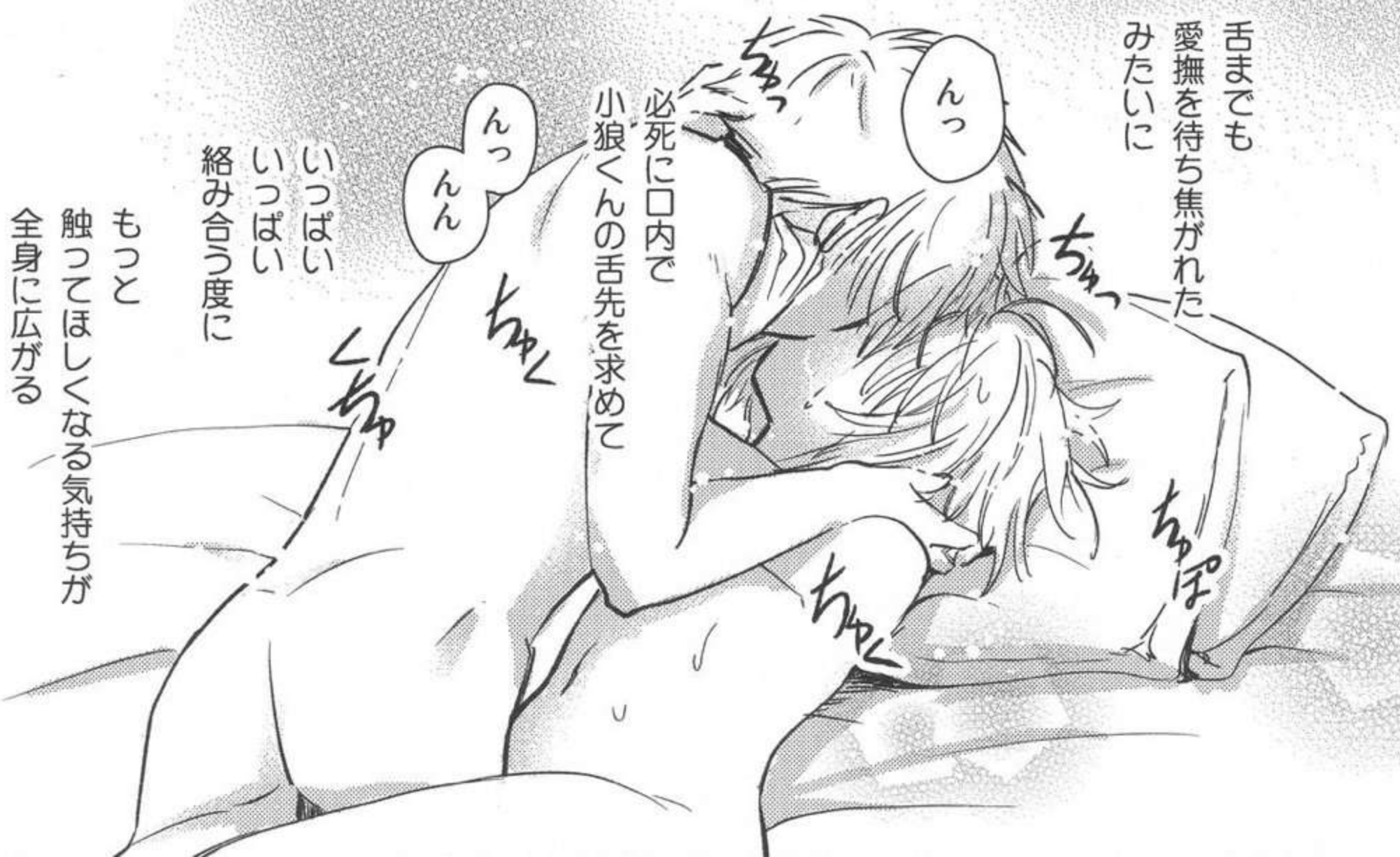
おに
おに
おに

おに
おに
おに

おに
おに
おに

は...
は...
は...

三日目



すっく
すっく
恥ずかしいけど

先っぽから伝わる
熱い体温に

もう…だめっ

さくらの弱い所を…
触ってほしいよお…

ねえ…
お願い…?

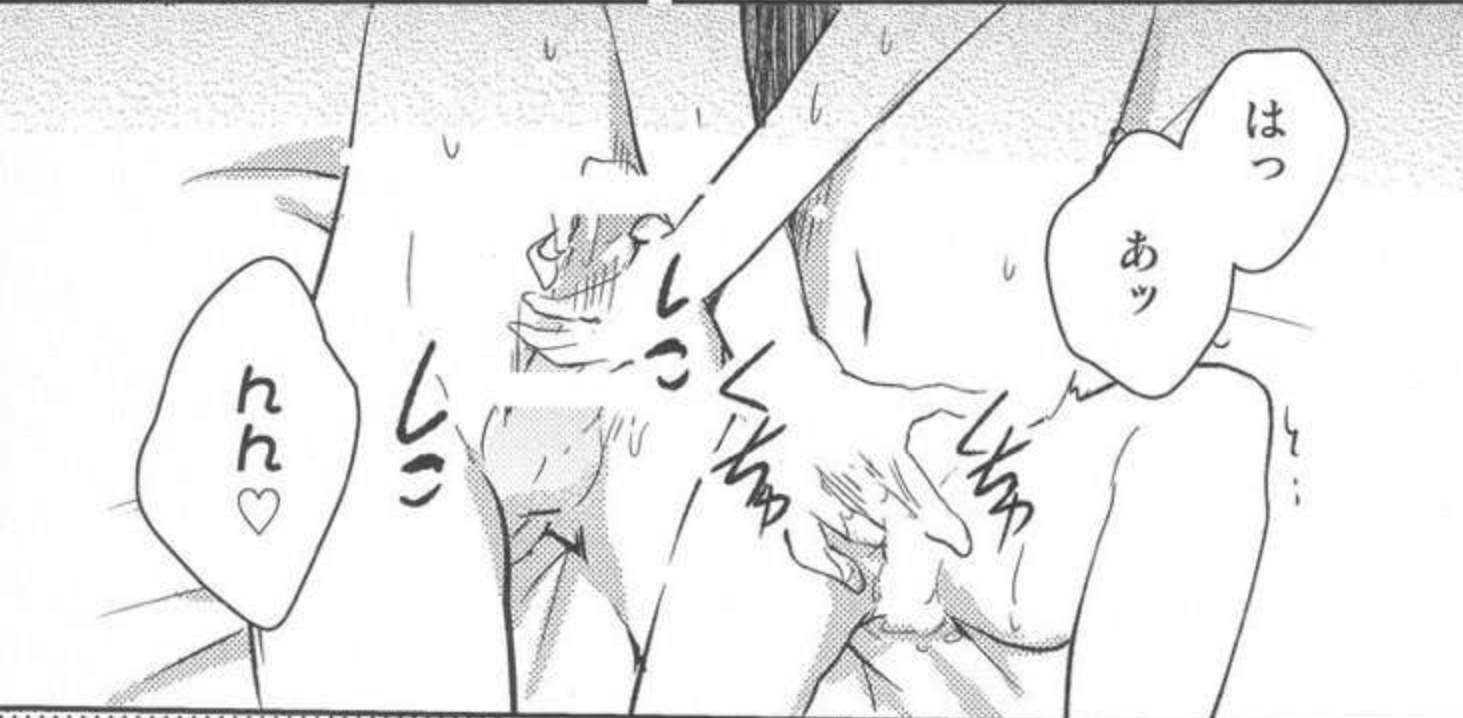
理性が溶けて
なにも…
考えられなくなっちゃった

ああ

まさしく…からな

おはほん♡





小狼の吐息の汗

ハア
ハア

荒々しい呼吸の優しい声

フー
フー

あんな……

乱れた私を見つめる視線

眉を寄せて
必死に我慢してるとして

ク
ク

ク
ク

ク
ク
ク

ク
ク
ク

全部

見しめなす

はあ

はあ

はあ

胸がズキズキして
体の芯が
焼けてしまっている

あんなっっ

ク
ク

だめ……
ほ……しい……み……

小狼くんが欲しい…

入れて欲しい…

さくらのナカに

もう……
明日まで
待てないよオ……っ

ねえ…

お願い……？

ピト



.....

ハア

俺も

ハア

そろそろ
限界...!



クチャ♡

ぬ♡

入れるぞ



ひやあか...♡

ピロ♡

.....



痛くなったら

言って



ちゅ

うん…

小狼くん
優しい…



あぁ

うっ
あっ

ぶっぶっ



あ

あ…あ



小狼くんの…

んぐ



あ…
ゆっくり
入ってくる

んぐ



!!

!!

痛い…?

…

…



初めての感じ

うん…

くるしい…
のか…

そうか…

くる…しい…

痛くない…けど



でも

ちやんと
感じたの

息が
できないほど
苦しい



体の中に

小狼くんのが
いっぱい
いっぱいになってて

小狼くんが
私の中にいること

嬉しすぎて

胸がぎゅっと
痛くなったの

こんなに
深く繋がるなんて

すごく幸せだよ

痛みが消えたかわりに

全身の隅々が
今までにない
甘い痺れに包まれたんだ

ね

ちよつとだけ
このままで
いい…？

なんか…
おかしくなっちゃう…

口の

さくらの蜜が

どンドン
溢れてくる

こっ
擦れられるの 好き？

うん
ん
気持ちよくて…
すきよお…♡
小狼くん…小狼くんは？

うん…っ

俺も

やん…動きたい…

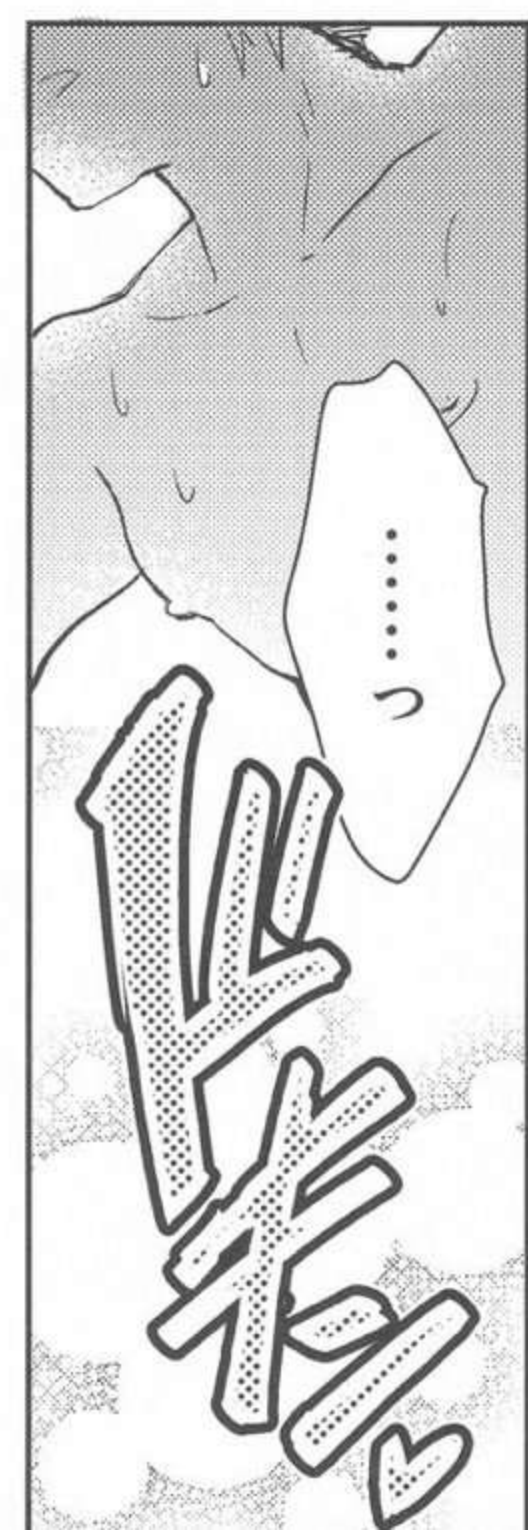
あつ…♡
変だよ…
腰 勝手に
動いちゃう…

あつ
ふあ

ダメだ そんな
動いたら

あ…もう
我慢できない…!







♡このせが

♡このせが
せん

うっあん
あん
はあ

♡このせが
このせが
このせが

あっ
♡このせが
うっ
……

このせが



腰…勝手に
動いちゃっ…



体が小狼くんの
動きに合わせて



あ…ダメ…
そこ…弱い

やだ

同時に擦ちやうと…
すぐイっちやうよ…



小狼くん…
どう…しよう…
怖い…よ

どうした?

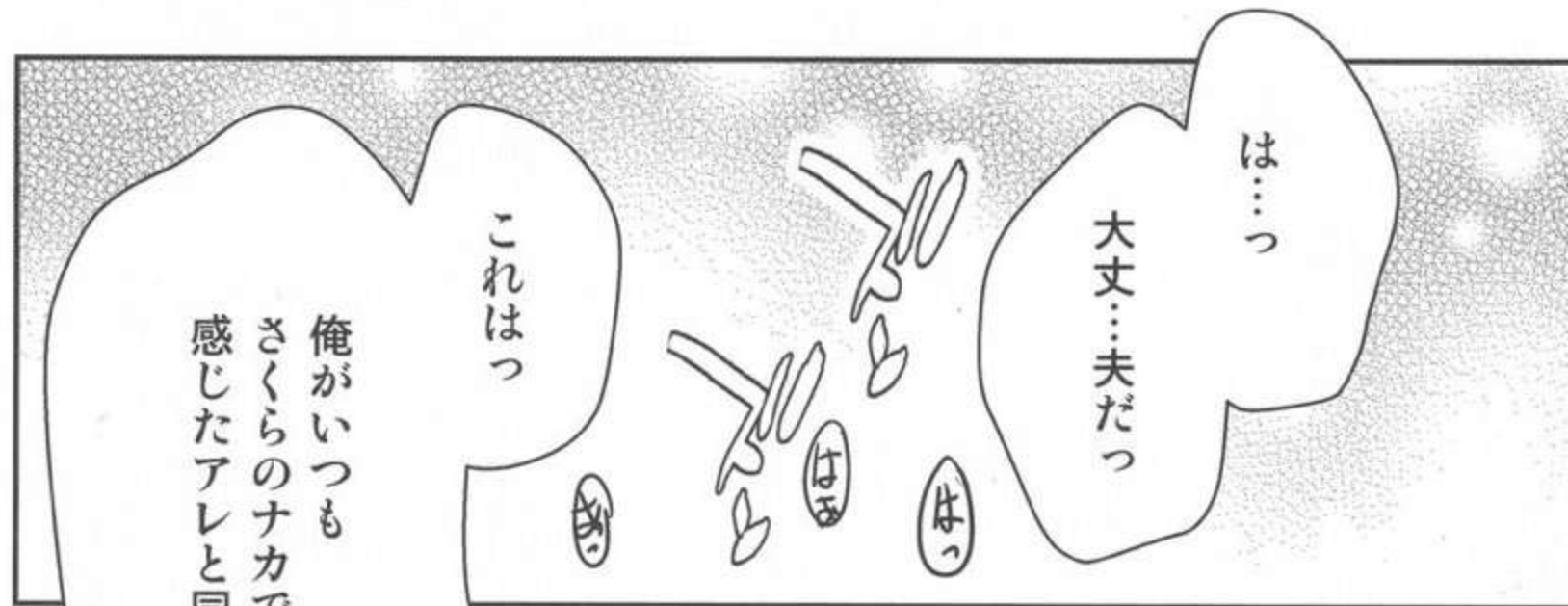
お腹の奥に
何か来そうで
怖いよ…っ

こんな感じ…
はじめて…



あ…ら…!

何を求めているの
わからないよ





思い込んだ
—ケリケリ

♡♡♡♡
♡♡♡♡…!

おん…おん…

おん…!

♡♡♡♡
♡♡♡♡

おん



苦しい息を
解放するために

今の私たち

波を乗せて
潮吹きしよケリケリ

小狼くん…
小狼くん…!

好き…

気持ちいい…♡

おん

おん

おん

おん

おん





おは...

!!

「
.....
」





大好きな人と
一つになるために

生まれて来たみたい

小狼くん…

だい…すき…
だよ…

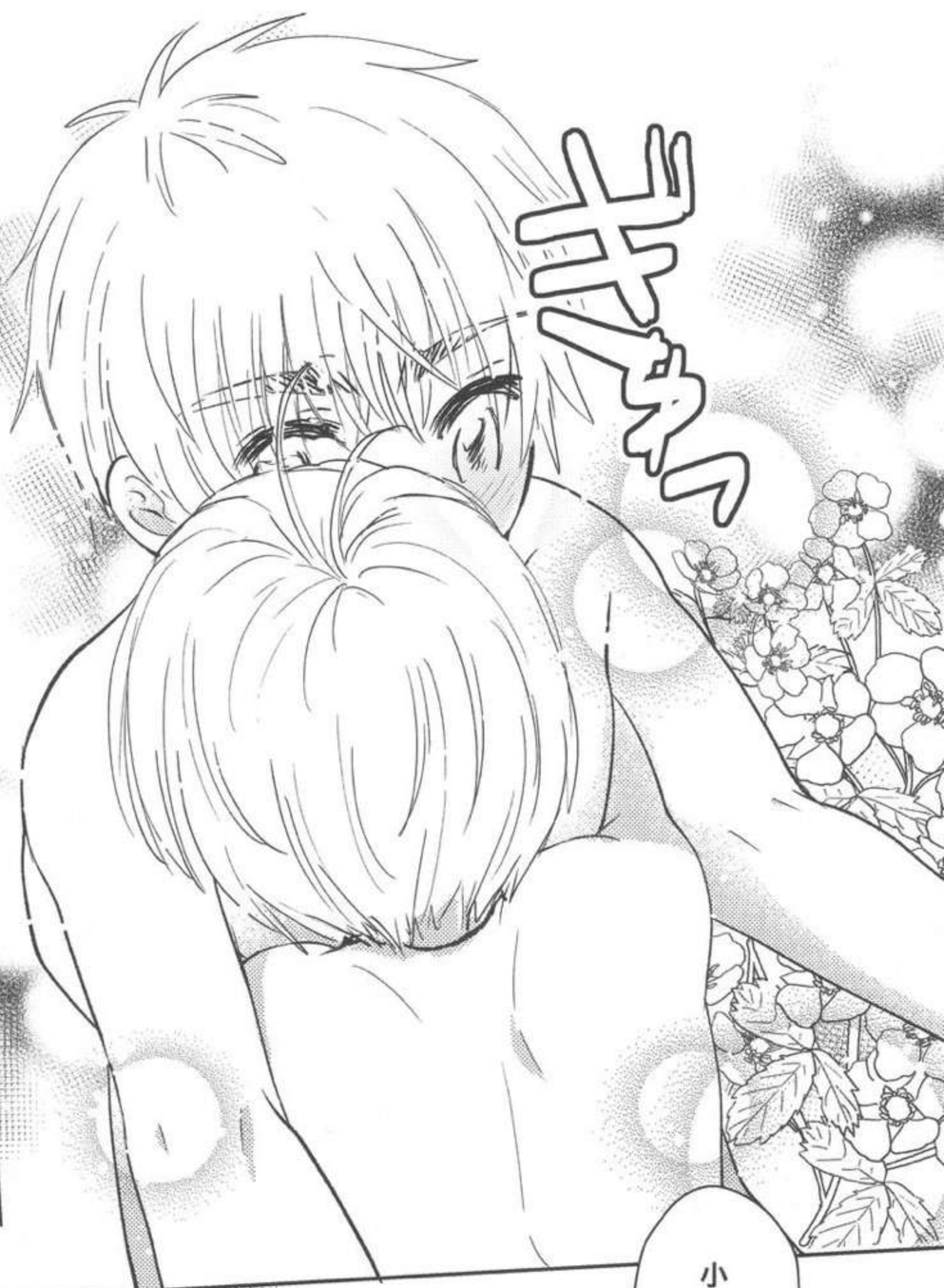
俺もだ

おんら

しあわせ







小狼くん…
小狼くん



一番おくに
小狼くんからの
気持ちを感じて

今まで
私にくれた
優しさ

この世で
一番大好きな思い

ぽんぽん

全部教えてくれた

あの感覚

もう一度
味わいたいなあ

小狼くん

あのね
おねがい…

ん？



最後に
小狼さんの
言っていたこと



もう一回
聞きたい

く
る
ん
っ
ほ
え
っ
!?



ほ
え
っ



…じゃあ

もう一回
さくらを抱いても
いいか？



…もう一回
聞きたい？



うん



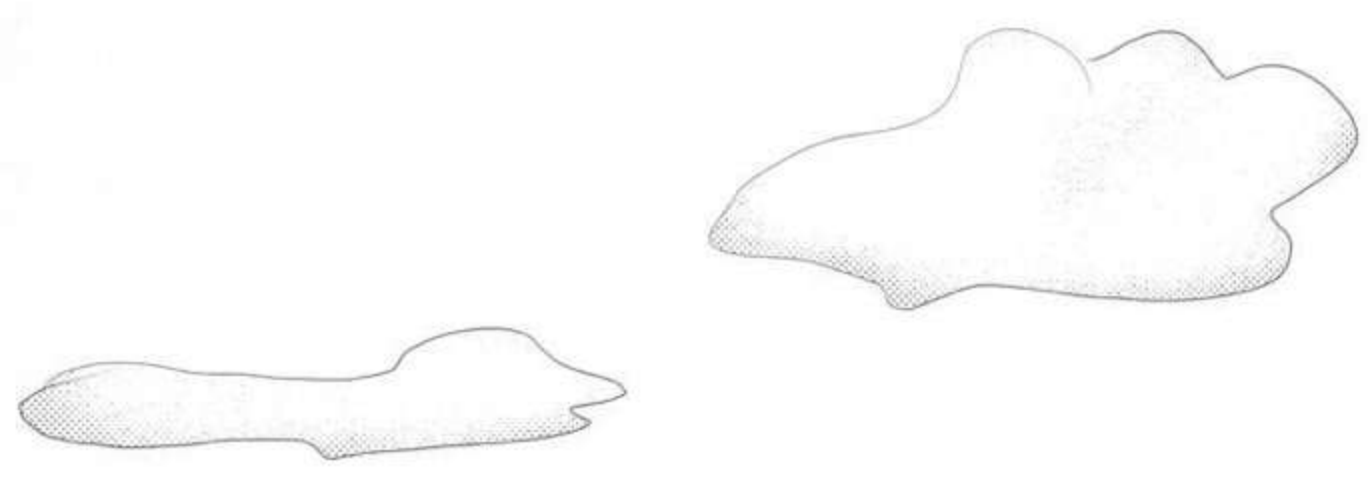
二人で

もう一度波に乗って

あの気持ちいい白い海へ行こう

♡…♡

「——愛してる」







はちみつ 遊





スロウ♡スイート♡モ-ニング

「ふ、あ、あああ♡小狼くん、それだめ♡だめえ……っ♡」
 「ここか？ ……さくら、すごい。えっちな顔してる……っ」

「ほええ、そんな事、言っちゃやだよ！」

小狼はさくらの白い足を担ぎ上げて、更に深く挿入した。腰を動かす速度がだんだんと早くなる。ぱん！ぱん！と皮膚が打ち付けられる音と、愛液が掻き混ぜられる音が、小狼の部屋に絶えず響いていた。

今日さくらは、小狼のマンションにお泊りに来た。

小狼とさくらの交際に厳しく目を光らせる兄・桃矢から、お泊りの許しを貰えるようになるまで、数年の涙ぐましい努力があった。今でも盛大に顔を顰めるし、決していい返事は貰えない。

だが、昔よりは許可が出る頻度が増えた。きっと、桃矢なりに小狼を認めてくれたという事なのだろう。父である藤隆は、こっそりさくらの恋を応援してくれている。時に二人の関係を窺める発言はするが、基本的に信用していますからと、笑顔で背を押してくれた。

ひと月ぶりのお泊りに、さくらは気合いが入っていた。全身を隈なくお手入れして、ささやかな甘い香りを纏わせて、お気に入りの新しい服で小狼の部屋へとやってきた。

小狼の部屋は相変わらず綺麗に片づけられていて、さくらが好きな甘い飲み物を出してくれる。大きなソファで二人でくつろいで、他愛のない話をして。二人で夕食を作って、食卓を囲んで。それだけでも、幸せな時間だった。

——今までは。

「……二人は、それだけではもう足りなくなっていた。」

「……寝室、行く？」

「う、うん……」

羞恥から少しぎこちなく、小狼はさくらへと手を差し出す。さくらは真っ赤になって照れながらも、その手を取った。

パタン、と。寝室の扉が閉められるのと同時に。二人は綺麗に整えられたベッドへと潜り込んで、スイッチが入ったように互いへと手を伸ばした。

二人の関係性が大きく変わったのは、三か月前。

キスやハグ、その先に続く、深い繋がり。三か月前にそれを初めて知った二人は、人生が変わる程の衝撃と感動を体感した。

生真面目な性格の小狼は、どこをどうすればさくらが悦ぶのかを真剣に考え、試した。純粹で素直なさくらは、大好きな小狼から与えられる刺激の数々を、疑う事無く受け入れた。

結果。体の相性も抜群に良かった二人は、性行為にのめりこんでいった。お泊り出来ない時も、時間を見つけては触れあつて、何度も体を重ねた。何度相手の事を深く知っても、全く飽きる事はない。それどころか、もつともつと欲しくなつて、食欲に求めた。

「さくら……、もう一回、したい。いいか……？」

「うんっ♡さくらも……！ さくらも、小狼くんと……もつと、したい」

恥じらう表情からは想像できない卑猥な言葉が、濡れた唇から零れ落ちる。

小狼は、ごくりと喉を鳴らした。こんなに大好きな女の子が、自分に触れられてこんなに乱れて、身勝手な欲望でさえも受け入れてくれる。好きになったばかりの頃、こんな未来が来るなんて誰が想像しただろう。ギン、と猛りを増した陰茎を、さくらの濡れた秘部に宛がった。

「あ……っ♡小狼くんの、おつき……♡」

さくらは、意識せずに零れ落ちた自分の言葉に、かあ、と照れた。

さくらもまた、小狼に抱かれるようになってから、自分の中に起きた変化に戸惑っていた。初めて知る快感と、愛される喜び。穏やかで優しい小狼が、自分を求める時に見せる獣のような獰猛な一面に、胸はときめいた。体を重ねる程に、知らない自分を晒され、隠していた恥ずかしい部分も容赦なく引きずり出される。だけどそれも、小狼になら全部見せたいと思えた。

はしたなく乱れてしまう程に、好きだと言う事を思い知る。この行為に溺れて行く程に、大好きな気持ち加速していく。

「あっ♡あっ……♡小狼くん、そんな激しくしちゃ、だめえ！ さくら、変になっちゃうよ♡」

「だって……、気持ちよくて、止められない。さくら、ここは？ ここは、好き？ 気持ちいい？」

「ふああああ♡ だ、だめえ！ クリ、こしゅこしゅされながら、そんなに奥、ツンツンしちゃ……っ、イっちゃ、イっちゃううう!!」

小狼はさくらを四つん這いにさせて、後ろから激しく最奥を穿った。そうしながら、ぶくりと膨張したさくらのクリ●リスを指で擦る。同時に訪れる強い刺激に、さくらは声色を甘くして、結合部から潮を噴いた。既にぐっしより濡れているシートに、水たまりが増える。

小狼はさくらの体を後ろからすっぽりと抱きかかえるようにして、尚も挿入をやめない。赤くなった耳をかぷりと食まれ、それだけの刺激でもさくらは力が抜けてしまう。

「ふにゃああ……♡しゃおらんくん、さくら、いきすぎておかしくなっちゃう……♡」

「さくら……♡さくらあ……♡」

切なげに響いた小狼の声に、子宮がきゅんとした。

長い長い夜が、過ぎて。月や星座の位置がぐるりと移動しても、東の空が白んでくる頃になっても、寝室から二人の甘い声が途切れる事はなかった。

お泊りの時は、時間も忘れてお互いを愛する事が出来る。それが幸せで、この日が来るのを二人とも待ち詫びていた。だけど、現実には想像をいつも軽々と超えていく。

その日は、今までで一番と言ってもいいくらいに、濃密で刺激的な夜を過ごした。

——チュン、チュン。

さくらは、ぼんやりと瞼を開けた。昨日、慌てて閉めたカーテンが僅かに閉まり切っておらず、隙間から眩しい光が入り込んでいた。微かに聞こえる小鳥の囀りが、朝を告げる。

さくらは気怠い体を動かして、サイドテーブルに置いてある時計を見た。朝の九時。学校の日だったら血の気が引く時間だったが、今日は日曜日だ。ホッと安堵して、やわらかな毛布の感触に笑んだ。

(……昨日、何時に寝ちゃったんだろう？ 全然、覚えてないや。小狼くん……たくさん、たくさん愛されて。昨日、何回シたんだろう……?)

かああ、と。顔に熱が集まる。

さくらは小狼も生まれたままの姿で、毛布にくるまっていた。小狼の逞しい腕に抱かれて、さくらは心地いい眠りの中に落ちていた。ここ以上に安心できる場所を、さくらは知らない。

触れるくらいに近い距離で、さくらは小狼の寝顔を見つめた。(睫毛、長い。小狼くん、寝息小さいよね。ちゃんと息してるか、不安になるくらい)

口元に耳を近づけると、微かな寝息が聞こえた。さくらは堪え

きれない笑みを浮かべ、小狼の寝顔を堪能した。寝ている時に、こんな風にじっくりと見られるなんて初めてだった。

それ程に、昨夜の行為は小狼にとっても激しく濃密なものだったのかもしれない。

思い出して、さくらは不意に、おかしい気持ちになった。

あんなにたくさんシたのに。まだ、朝の明るい時間なのに。きゅんきゅんと、覚えのある感覚が下肢に伝わる。

(ほえ……? なんか、変……?)

違和感に気付いたのは、その時だった。非現実的で、夢のように幸せな朝。気怠い体と、昨夜の情事を思い出させる、幾数もの赤い痕。

まだ覚めきっていないさくらの頭が、遅れて今の状態を把握する。

「——!?!」

(小狼くんと、私……、まだ、繋がったまま……? え? あのまま、寝ちやったの……?)

さくらは信じられない気持ちで、そっと毛布を持ち上げた。熱のこもった空間に、涼やかな空気が入り込む。小狼を起こさないようにと、さくらは薄闇の中を覗き込んだ。

隙間なく抱き合っている二人の体。小狼の陰茎は、さくらの膣内に埋められたままだった。

ぱっ、と毛布を戻して、さくらは落ち着かなくなる自分の動悸

を感じた。まるで太鼓のように、激しく打ち鳴らされる。

(お、落ち着いて……! さくらのナカに、小狼くんの、あ、アレが……、入ってるんだ。きつと昨日、小狼くんも疲れてそのまま寝ちやって……。え? これ、どうすればいいの?)

さくらは若干のパニックに陥りながらも、自分の中にいる小狼の事を意識した。昨夜の事を思い出した途端、体もそれを反芻するように敏感になる。

(どうすればいいの……? 起きてよお。小狼くん……)

縋るように見つめるが、小狼は起きる様子がない。さくらは、疼きだした自分の体を抱きしめる。高まり始めた熱を持て余して、きゅ、と目を瞑った。

そっと、抜けばいい。小狼が起きる前に、気付かれる前に。腰を少し引いて、ナカに入ったままの小狼の陰茎を解放してあげればいい。わかってはいるのに、さくらは動けなかった。

恥ずかしい気持ちもあったが、それよりも何よりも、今の状況に興奮し始めている自分がいた。

さくらは小狼の寝顔を切なげに見つめながら、少しずつ上がっていく自身の呼吸と体の変化に気付いた。

(どうしよう……。濡れて、きちやった)

朝からなんてはしたないんだろう。さくらは自己嫌悪の涙を滲ませる。それでも、一度熱がついた体は、どうにも出来なかった。抜くことも、助けを求める事も出来ずに、さくらは小狼の体

にぎゅつと抱き着いた。

その時。

「ほ……え？」

途端に、下半身の様子が変わった。さくらは驚いて、びくんと大きく震える。

瞳内にあつた違和感が、更に質量を増していく感覚。それは上向きに猛るように変化して、さくらの敏感な部分を刺激する。

「さくら」

「小狼くん……！ お、起きたの？」

「……今、起きた」

いつの間にか、小狼の目はぱちりと開いていた。さくらは、その顔を見て、林檎のように顔を真っ赤に染め上げた。小狼の顔も、それに負けないくらいに赤くなる。

「ごめん。昨日、そのまま寝ちゃったみたいだ」

「う、ううん……！ 私も、気付かなくて」

「……しかも、今も。こんな……、朝から、ごめん」

「——！」

「でも。さくらも……？ えっちな気持ちに、なった？」

直球で聞かれて、さくらは目も当てられないくらいに動揺した。ぱくぱくと口を開いて、何か言おうとする言葉が出ずに、羞恥から涙を浮かべた。

小狼は焦った顔で、しかしやはり上手い言葉が見つからず、さ

くらの後頭部に手を回して抱きしめた。

「違うんだ。責めてるんじゃない……、嬉しいんだ。俺だけじゃ、ないんだって」

「……ほんと？ 朝からえっちな事考えてたんだよ？ 幻滅しない？ さくらの事、嫌いになったりしない……？」

不安を口にする、涙が溢れた。さくらの言葉を聞いて、小狼は表情を強張らせる。強く射貫くような瞳で、さくらへと叫んだ。

「嫌いになんて、なるわけないだろ！ むしろ……、もう、自分でもどうしたらいいかわからないくらい、さくらの事が好きなんだ。……わかる、だろ？」

「ひゃあんっ♡」

小狼が少し腰を揺らしただけで、強い快感が生まれ、さくらは堪らず喘いだ。小狼は恥ずかしそうに目を伏せて、言った。

「今も……、こんなになるのは、さくらだからだ。さくらの、せいなんだからな」

「はうう……♡ 私も、私もだよ……。小狼くんの事、好き。大好き。私がこんなにえっちななっちゃんなの、小狼くんのせい、だよ？」

「じゃあ、お互い様だ」

小狼は、見惚れるくらいに綺麗な笑顔で笑うと、さくらの唇を塞いだ。

朝一番に寝顔が見られて、大好きな人の体温に抱かれながら、こんなに幸せなキスが出来る。なんて幸せなんだろうと、さくらの胸がじーんとした。

ちゅ、ちゅ、とキスを繰り返しながら、小狼はさくらを熱っぽく見つめた。

「それで、その……。コレ、どうする？」

「ほええ……。ど、どうしよう？」

「俺は、さくらの時間が許すなら、だけど……。まだ、離れたくないんだ」

小狼の言葉が、さくらの胸に矢になって刺さる。気持ちには、同じだった。

今日は日曜日で、どこかにお出掛けする事も出来る。窓の外は見えないけれど、入り込む陽光から察するにすごくいい天気なのだろう。支度をして、めいっばいにおめかしをして、小狼と出掛けたい。

「だけど、今は。」

「私も。まだ、このまま……。二人つきりで、いたいな」

それだけを言うのにも、照れてしまう。初々しいさくらの反応に、小狼は堪らなくなって、深く口づけた。舌を差し込まれ、さくらは驚くが、すぐにとろんと瞳が蕩けた。

「あ、ふ……。ん」

「ん……。ん……。ちゅ、」

「ちゅ、……。ん♡ふあ♡」

舌を絡めて、夢中になってキスをする。小狼はゆるゆると腰を動かして、さくらの背中をそつと撫でた。その手の動きに、ぞくりと快感が走る。

「あ……。♡ひやおら、きゅ……。♡」

「ん……。♡」

「ゆっくい、しゆるのも……。きもちいい、ね……。♡」

舌を絡めながら、さくらはたどたどしく話す。

小狼は、今すぐにも上へのしかかって、滅茶苦茶に犯してしまいたい衝動を、ぐつと堪えた。そうしてしまうのは、勿体ないと思ったのだ。

昨夜、欲望のままにさくらの体を貪って、愛した。それとは逆に、今の幸福を大切に味わいたい。ゆっくりと隅々まで、さくらを愛したい。小狼は、そんな風に思っていた。

「あ……。♡その、触り方……。」

「嫌か？」

「ううんっ、違うの。なんか、ふふっ、少しくすぐったいけど、気持ちいい……」

小狼の手つきは、指先や手のひらで触れるか触れないかの、少し焦れたいものだった。ソフトな触り方で、さくらの全身をくまなく愛撫した。性器や敏感な部分だけでなく、背中や腰、お尻の辺りも、さわさわと触れる。

さくらは、くすぐったさともどかしい刺激に蜜を溢れさせる。小狼の体に自分の体を擦り寄せて、ねだるように上目遣いで見つめた。

そうすると、小狼の陰茎が更に昂ぶりを増した。

小狼はさくらのお尻を、ぐっと両手で掴んだ。やわらかな尻肉に指を埋めるように、揉み上げる。腰を動かしたくなる衝動を、そうすることで堪えた。

「あ……っ、あんっ♡」

小狼がお尻を揉み上げる事で、ぐっ、と体が密着して、結果的に小狼の陰茎がさくらの奥深くまで刺さる。大して動かしていなのに、高められる快感と焦らされる刺激に、二人は呼吸を荒くした。

「さくらの、ナカ、すごい。きゆうきゆうって、俺のを締め付けてくる」

「だって、だってえ……♡小狼くんのも、どんどんおつきくなるよお……♡ドクドクって、脈打ってるのわかるの……♡さくらのナカ、小狼くんの形、覚えちゃう……♡」

はあ、はあ、と。互いに熱っぽく見つめ合い、体を擦り合わせた。

焦らされているのに、幸せで。もう一步先に進んでしまえば楽になるのに、そうしない。今の状態が、なんとも言えない強い快感と幸福感を生んでいた。ゆるやかな動きでお互いを愛撫して、

刺激し合う。するすると毛布が滑り落ちて、隠すものは何も無くなる。

早朝の薄明りの中、二人の目にはお互いの淫靡な姿がよく見えた。

「はあ、はあ……」

「はあ、ん……♡あ……、あ♡」

「気持ち、いい……。さくら、少しだけ動いていい……?」

小狼は我慢できなくなつて、さくらにそう聞いた。今の均衡を崩すのは惜しいと言う気持ちもあつたが、それ以上に欲しくて堪らなくなった。

小狼の言葉に、さくらは一瞬黙つた。そのあとに、予想もしなかつた言葉を口にした。

「そ、それなら。私が、動いてみてもいい……?」

「……えっ」

小狼は、驚いた。目を見開いてさくらの顔を凝視すると、ハツとした碧の瞳がみるみるうちに羞恥の色に染まっていった。

さくらが、自分からそういうコトをするのは今までになかつた。全くの未経験だ。いつも小狼のしたい事を受け入れ、その手管に翻弄されるだけで、精一杯だったから。

しかし。小狼がさくらをもっと気持ちよくさせたくて勉強していたのと同様に、さくらもまた、小狼の為に自分が出来る事はなにかと、独自で情報を仕入れ学んでいた。その情報源の殆どが、

博学で物知りな友人・奈緒子の貸してくれる本ではあったが。

「ほ、本当に……？ さくら、無理してないか？」

「うん。うまくできるかわからないけど……。本当は、昨日も言おうと思ってたの。でもしてもらえばっかりで、いつの間にか寝ちゃってて……」

「い、いや。それは、俺がガツガツしすぎたせいだ。さくらは悪くない」

言いながら、お互いの顔が赤面する。二人は視線を合わせて、同時に笑った。

さくらはゆっくりと体を起こした。小狼は手を伸ばして、さくらの体を支えた。繋がったまま、さくらは小狼の上に跨る。姿勢が変わっただけで、膣内の刺激も変わる。

小狼は、静かに感動していた。一糸まとわぬ姿で、さくらが自分の上に跨っている。下からそんな光景を見られる事が、とにかく新鮮だった。

じ、と見つめていると、さくらは顔を赤くした。涙で潤ませた瞳をそつと下に落とすと、小さな声で言った。

「小狼くん。そんなに見ないで。恥ずかしい……」

「っ、ご、ごめん」

「うまく出来るか、わからないけど……っ。頑張るね」

さくらは小狼のお腹に両手を添えると、ゆっくりと上下に腰を動かした。

たどたどしい動きだったが、それが逆に興奮を煽る。小狼は、視覚的にも酷く興奮して、無意識にさくらの腰に手を添えた。

「ふ、ん……っ、ん、う……♡」

思っていたよりもうまく動けず、さくらは困惑していた。初めての事で戸惑いと羞恥が邪魔をする。それ以上に、自分のナカに入っている小狼を強く感じてしまっ、少しの動きでも腰が止まってしまう。

小狼の視線が自分に向いているのも、恥ずかしい。なのに、キユンキユンと子宮が反応する。

「さくら。無理、しないで。ゆっくりでいいから……」

「うん……っ、でも、小狼くん、いつも私の事、気持ちよくしてくれる、から……。少しでも、お返ししたく、て」

「……っ！」

「でも、難しいね。小狼くんは、いつも私の事、たくさん気持ちよくしてくれて……。小狼くんは、やっぱり凄いやお……♡」

上気したさくらの頬と、甘えるような言葉に、小狼の頭がカッと熱くなった。腰に添えられていた手が、さくらの双丘を掴む。

「ほえ？」

様子が変わった事に、さくらが気付いた瞬間。小狼は、さくらの体ごと下から思い切り突き上げた。

——どちゅッ！

「!? ふあああああ——っ♡♡♡」

「あつ……!! さくら、今のでいった……!!」
 きゅううう、と締め付けられ、ぴゅつ、ぴゅつ、と愛液が噴き出した。

さくらの体は力が抜けたように倒れて、小狼へと抱き着いた。そうしている間にも、絶頂の余韻に膣内は痙攣したように震え、その刺激に小狼も射精しそうになる。

小狼はドキドキしながら、自分の肩口で苦しそうに息をするさくらを見つめた。さくらはゆっくりと小狼の方を向く。両目から涙を滲ませて、さくらは吐息交じりに言った。

「しゃおらんくん……、しゅごい、よお……♡」

キラキラと星を湛える様な綺麗な瞳の中に、自分の姿が映っている。その事に小狼は興奮して、そのままの態勢で再び腰を突き上げた。

「ふあ♡あつ♡あつ……♡だめ、いったばかりで……っ!!」

ふああああんっ♡♡」

さくらは小狼の上に跨った状態で、為す術無く揺さぶられた。何度も秘部から潮を噴いては、小狼の体に強く抱き着く。小狼はさくらの頬を撫でて、呼吸ごと唇を塞いだ。

一度箍が外れてしまっただけからは、もう制御出来なかった。深く口づけながら、激しく腰を打ち付ける。

「ひい、ん——……♡また、イっちゃやう、イっちゃやうううう♡♡」

さくらの愛液をお腹で受け止めながら、小狼は尚も腰を動かした。ぐるんと態勢を変えて、膝の上に抱っこするような体位で下に揺さぶり、ツンと尖った乳首を口に含んで転がした。

「やあ、やらあつ♡こんな、さくら……、おかしくなっちゃやうよお」

次から次へと襲い来る快楽に、さくらは不安そうに瞳を揺らした。縦るように伸ばされた手を、ぎゅつと握って。少しでも安心できるようにと、小狼は優しく抱きしめた。

「大丈夫だ。さくら……。俺は、もうとっくに……おかしくなってるから」

「ほええ……?」

「だから、安心して。もっとおかしくなって……!!」

「っ!!」

さくらの両足を肩に担ぎ上げて、更に深く挿入した。小狼は、さくらの膣肉を抉るように自身の欲望を捻じ込んだ。快感に下がった子宮口が小狼の陰茎の先に吸い付くようで、その快感で射精感がぐんと上がる。我を忘れたような激しいストロークで、さくらのナカを容赦なく蹂躪する。

「はっ、はあつ♡しゃおらんく、もっど……ゆっくりい……♡」

「ごめん、さくら。もう、ゆっくりなんて出来ない……っ!!」

「ひああああんっ♡♡」

——ばんっ、ばんっ！

——どちゅっ、どちゅっ！

ひたすらに腰を動かして、絶頂へと駆けあがっていく。

さくらは何度も意識を失いそうになりながらも、自分のナカで蠢く小狼の熱を追った。ぼんやりとした視界の中、映る小狼の顔は余裕が無くて必死で、それがさくらの心をときめかせた。

ゆっくりでも、激しくても。

余裕が無くても、がむしやらでも。

(好き……♡小狼くん、小狼くん♡大好きだよ……♡)

「はあ、はあ……っ、さくら、もう、イク……！」

「うんっ、うんっ♡小狼くんのいっぱい、さくらのナカに出してえ♡」

「——さくら……！」

最奥まで届く様に。勢いよく打ち付けられ、熱い精がどくどくと放たれた。自分の膣内を満たしていく熱。さくらも快感に打ち震えて、声も出ないような絶頂感を味わった。

お互いに呼吸が整わないまま、強く抱きしめ合った。最後の一滴まで欲しいというように、さくらの膣内がきゅきゅと小狼の陰茎を締めあげる。

(はう……♡きもち、よかったあ……♡)

さくらが、ホッと一息ついていると、小狼が地を這うような低い声で言った。

「……ごめん、俺、また暴走して……」

「ほえ？ え？ 小狼くんが謝る事なんて、なかったよ？」

小狼はさくらの肩口に額を押し当てようにして、重く溜息をついた。

今、どんな顔をしているんだろうと、さくらは心配になる。それ程に、小狼の声は気落ちしていた。

「ゆっくりしたいって、さくらがそう言ってたのに。俺、本当に堪え性が無いな……。反省する」

「でも、でも……っ！ さくらが、うまく出来なかったからだよね？ 小狼くんは凄いよ。私も、あんな風に動けるように、頑張っつて練習するね！」

小狼を励まそうと、さくらは必死にそう言った。途中、何を言っているんだろうと我に返るが、口から零れてしまった言葉は戻らない。「はうう」と顔を真っ赤にして狼狽していると、小狼が小さく嘔き出した。

「……練習って、何する気だ？」

「——！！」

顔をあげた小狼は、おかしくて仕方ないと言うように笑っていた。笑われるのは恥ずかしいけれど、小狼が元気になってくれたことに安心する。

つられたようにさくらも笑うと、小狼が急に真面目な顔になって、頬を摘まんだ。

「さくらは、今のままでいいから。ゆつくりでいいんだ。……」

『そういう練習』は、俺と一緒にの時だけ。いいな？」

「う、うん……？」

「俺も、暴走しないように鍛錬する。お前に対する理性を鍛えな
いと……」

真剣な顔で考え始めた小狼に、さくらは「？」と首を傾げる。

今しがた、激しく愛し合った後にする会話として、これは正しい
のだろうか。

(でも。小狼くんが、私との事……えっちの事も他の事も、こう
やって真剣に考えてくれるの、嬉しいな)

愛おしさが増して、さくらは両手を伸ばした。小狼の首に手を
回して体を起こすと、ちゅ、と触れるだけのキスをした。

驚く小狼の瞳を間近で見つめながら、さくらはとろけるような
笑顔で言った。

「小狼くんも、今のままでいいから……。その代わり、さくらの
事、もつともつと好きになってね？」

「——！」

身体を重ねる程に、相手の事がもつともつと好きになる。小狼
もそうだったらいいな、と。深く考えずに発した言葉だった。

しかしさくらは、次の瞬間に顔色を変える。

「……ほえ？ えええ！？ しゃ、小狼くんの、またおつきくな
って……？」

「理性……、忍耐……」

「小狼くん？ 小狼く……、ほえええええ♡♡」

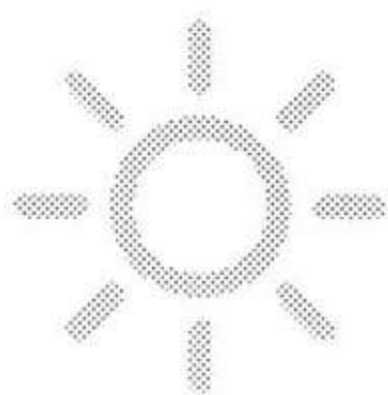
日曜日の昼下がりに。外はピカピカの晴天で、風も穏やか。絶好
のおでかけ日和だった。

しかし小狼とさくらがそれを知るのは、翌日の事となる。

カーテンも開けきれない薄暗い部屋の中、ベッドの上では、絶
えず甘い声と卑猥な音が響いていた。

時にゆつくりと、時に激しく。がむしゃらに、甘やかに、愛を
囁きながら。

二人は今日も、めいっぱいお互いの『大好き』に溺れるのだっ
た。



Wish
♡♡
With
Love



ごんごの目も
大オオオオ



おし
おし
おし



蜜月のしおり

はちみつ 遊

蜜月のしおり

物語のはじまりは――。

可愛い可愛い奥さん・さくらからの、こんな一言でした。

「あのね、小狼くん。私――……」

それを聞いた旦那さん・小狼は、うんと考えました。さくらの願いを叶えてあげたい。そしてそれは同時に、自分自身の願いにも他ならなかったから。

その為には、どうすればいいか。

考えて考えて――二人だけの楽園を作る事を、決めました。

「……はあ」

馴染みのスーパーマーケットで大根を片手に、さくらは溜息をついた。

今日の献立はどうしようと、頭の中で組み立てる。そのあとに、小狼は今日も帰ってこれないのだろうか、二人分作っても無駄になってしまいうだろうかという思考に至る。それなら、いつ帰ってきてでも食べられるように冷凍出来るおかずを作ろう。そこまで考えて、気分は沈んだ。

既に、冷凍庫にはここ数日作ったおかずがいくつかのタッパーに分けられて入っている。小狼は最近、仕事場から帰らない事が多かった。帰ってきてても夜中だったり、朝方だったり。数時間、睡眠と言えるかどうかもわからない時間を過ごしたあと、また仕事場へと出かけていく。さくらはただ、隣で眠る小狼に寄り添う事しか出来ない。

（今日も遅いのかな。小狼くんのお仕事、いつまで忙しいんだろう）

鳴らない携帯電話を見つめて、さくらは何度目かの溜息をついた。

小狼とさくらが結婚して、数年が経った。さくらは大学を卒業して、今は知世が携わっている大道寺コーポレーションの服飾工

房の手伝いをしている。服を作るお手伝いが出来るのは幸せだったし、毎日楽しい。家事をして、仕事をして。さくらの生活は充実していた。

だけど、小狼がいないと途端に寂しくなる。一人きりで冷たいベッドに入ると、泣きたい気持ちになった。

仕事を一生懸命に頑張っている小狼に、「寂しい」だとか「一緒にいたい」なんて我儘は、言えない。——だけど。言葉にしなくても、おそらく小狼は気づいている。

さくらは、沈み込みそうになる自分を叱咤して、俯いていた顔を上げた。唇をきゅつと結んで、気合をいれるように拳を握った。

(暗くなるの、やめよ！ 小狼くんだったって、ずっと忙しいわけじゃないもん。帰ってきた時に、笑顔でおかえりって言っておあげるんだ)

さくらは気を取り直して、今夜の献立に必要な食材を買い物かごに入れるのだった。

「こんにちは！」

「李さん。こんにちは。今日はいい天気ですね」

「はい。あったかいですね。……こんにちは」

「あ、あうー」

近所の奥さんと、その腕に抱かれた赤ちゃんに笑顔で挨拶をする。人妻とは思えない初々しさと可憐さで、近所では知らない人はいないと言ってもいいくらいに注目されていた。それに加えて、性格も裏表がなく優しい。子供達にも大人気だった。

バイバイ、と小さな手を握って、さくらは笑った。さくらが笑うと、赤ん坊も笑う。ふわりととろけるような頬っぺに癒されて、さくらは上機嫌になった。

だんだんと、自分の家が見えてくる。遠目から見ても、さくらは我が家の様子が違っている事に気付いた。

「車だ……？ 誰のだろう？ ……あつ！」

艶々と磨かれ、光を反射する車体。見るからに高級な乗用車が、自宅前に停められていた。運転手はいない。

もしかして、と。さくらは慌てて玄関の扉をひいた。案の定、鍵は開いていた。

「小狼くん!？」

靴を脱ぐのも、もどかしい。名前を呼んで急いで廊下を走ると、

奥のリビングから出てきたのは意外な人物だった。

「さくら様、お久しぶりです」

「偉さん!? あ、お久しぶりです……! あの、小狼くんはいますか?」

「はい。さくら様をお待ちです。……では小狼様、荷物の方はこれで最後でございますね。あとはこちらで手配します。お車で、お待ちしておりますので」

偉はリビングの中にいる小狼にそう言うと、さくらに会釈をして玄関へと進んだ。その手には、大きなスーツケースがある。

それを見て、さくらの胸がズキンと痛んだ。

(もしかして、出張? スーツケース大きかったし……また、長くかかるのかな)

しばらく会えない日々が続くのもかもしれない。そう思うと、知らず涙が溢れる。さくらはハツとして、慌ててそれを拭った。

「さくら、おかえり。待ってたんだ」

「小狼くん……! 小狼くんも、おかえりなさい!」

その笑顔を見た途端、さくらは堪らなくなって小狼に飛びついた。小狼は少し驚きながらも、その勢いも体温も危なげなく受け止めて、ぎゅ、と抱きしめ返す。

無言の抱擁が、ただただ幸せで。さくらは、ずっと今が続けばいいのにと、強く思った。

腕の力が緩んで、小狼の掌がさくらの頬を撫でた。見つめあう

と、寂しさがこみ上げる。さくらは零れそうな本音を寸でのところで閉じ込めると、小狼の掌に頬ずりをした。笑顔を作ろうとしたけれど、どうしてもうまくいかない。

「……お出掛け、するの?」

「ああ。急で悪い。でも、準備はもう出来てるから」

「そっか。……うん。わかった。どれくらいで帰ってくるの?」

「五日だ」

(……うう。長いよお)

じわじわと、堪えきれない涙が滲む。手に持ったままのスーパの袋が、カサリと音を立てた。今日も、二人分の夕飯の材料を買ってしまった。全部、無駄になってしまいうのだろうか。

「……いっしょに、食べたかったな」

「え?」

「あつ、ううん……。そうだ、移動中に食べられるように、お弁当作るよ。小狼くんの好きなのも作ってあるの! ちょっと待ってね」

さくらは殊更に明るく言うと、小狼から離れて冷凍庫を開けた。ここ数日で作ったおかずを取り出すと、後ろから小狼が覗き込んで言った。

「こんなにつけてくれたのか。ごめんな、さくら」

「ううん。お仕事だし、仕方ないよ」

「……うん。美味しそうだ。全部持っていく。今日の食材、それ?」

「え、うん」

「じゃあ、折角だからそれも持っていこう」

小狼はそう言うと、テキパキと行動を始めた。偉に電話をして呼び戻すと、さくらの作ったおかずや今日買った食材も車に運んだ。

さくらは、不思議に思い始めていた。スーパーの袋から飛び出した大根やネギ。作り置きのおかずならともかく、食材も持っていくというのはどういう事だろう。

そして、一番に違和感を感じたのは、小狼自身の様子だった。いつもと変わらないように見えるが、小狼が妙に浮かれている上機嫌である事を、さくらは感じていた。

「あの、小狼くん……」

「よし、行くか」

小狼の手がさくらの肩を抱いて、そのまま車の中へと誘う。呆然とするさくらの、小狼は笑った。かちり、とシートベルトを締める音がする。ミラー越しに笑んだ偉と目が合って、さくらは急激に我に返った。

「ほええええ——?!」

さくらの戸惑いの声が響くと同時に、二人を乗せた車はゆっくと発進した。

空港から飛行機に乗って約八時間。更に、プライベートジェット機に乗り継いで二時間。

何が何やら。わからないまま、辿り着いた先は思ってもみない場所だった。機内から小狼に手を引かれて外に出ると、感じる風が慣れ親しんだものとは全く違っていた。

「あつい……」

「赤道に近いところだから。上着脱いでも大丈夫だろ？」

「う、うん」

小狼に言われて、さくらは薄手のカーディガンを脱いだ。

友枝町は春先でまだ肌寒かったが、今現在は真夏の気候だ。照り付ける太陽の熱さが、目の前に広がる光景が、ここが日本じゃない事を教えてくれる。青々と茂ったヤシの木、一面に広がる青い海と、真つ白な砂浜。自分達以外には、誰もいない。

小狼は異国の言葉でジェット機の操縦士と話した後、さくらの元へと駆け寄った。轟音と共に再び空へと飛び立ったジェット機を見送って、さくらは未だ現実感を伴わないまま、小狼の後を付いて歩く。

今回の旅の目的も行き先も、何一つ聞かされなかった。一度、日本を発つ前に思い切つて聞いてみたら、小狼は子供のようにつつ、「内緒だ」と言った。悪戯っ子のようなその顔に、さくらの胸はときめいた。

それ以上は、何も聞かなかった。聞かなくてもいい、と。そう思った。わくわくして、ドキドキして。これからどんな場所に連れて行かれるのだろうと、さくら自身も楽しみに思えてきたのだ。それに。また離れ離れになると覚悟していたからこそ、今一緒にいられるというだけで、ただ嬉しかった。

(でも、まさか……南の島に来るとは、思つてなかったかも) 小狼がこんな風に突拍子もない事をする時は、何かしらの理由がある。長く付き合つて来た年数の中でもそう多くはないが、その殆どがさくらを喜ばせる為だったように思える。

よくわからないまま、こんな遠くまで連れてこられてしまったけれど。今、さくらの胸の内は浮かれる気持ちと嬉しさで満ち溢れていた。

南国の風をいっぱい浴びて、さくらは駆けだした。キラキラと光る海が、呼んでいるような気がした。

「さくら！」

「小狼くんも、一緒にいこ！」

最高の笑顔で手招きするさくらに、小狼も嬉しそうに笑った。手を繋いで、照りつける太陽の中、二人は白いビーチへと足を踏

み入れた。

「わあい！」

さくらは靴と靴下を脱ぐと、ワンピースの裾を捲り上げて海へと入った。小狼もそれを追いかけて、バシャバシャと水音を立てる。水面の中にある自分の指先がはっきりと見えるくらいの、美しい透明度。小さな魚が足の周りをすいすいと泳いでいるのを見て、さくらは目を輝かせた。そうして、わけもなく笑った。

「楽しい！ ここに、五日いられるの？ お仕事は？」

「大丈夫。片付けてきた。俺の不在に何かが起こっても、どんな緊急事態が起こっても対処できるように、万全に準備してきた」

「ほえ……、それって、結構大変だった？ もしかして、お仕事忙しかったのって、そのせい……？」

さくらは、すぐにその結論に思い至る。

ここ最近の、小狼の異常な忙しさ。家に帰つてこられない程の激務に身を投じていたのは。

全部全部、この日の為に。

小狼は、悲し気に曇るさくらの顔をじつと見て、苦く笑った。

「ぱしゃん、と水が跳ねて、二人の距離が縮まる。小狼はさくらを抱きしめて、耳元で言った。

「ここにいる間は、仕事の事は一切考えない。さくらと一緒にいるだけの、時間を作ったんだ」

「……………」

「嬉しくない？」

さくらの顔を覗き込んで、小狼はシュンとした態度で問いかけた。さくらは困ったように眉を下げて、力なく小狼を睨んだ。

「嬉しくないわけ、ないよお」

「じゃあ、笑って。さくら」

頬を包む大きな手に、頬をすり寄せる。さくらは、ふわりと花が綻ぶように笑んだあと、「しゃおらんくん」と甘く名前を呼んだ。

「嬉しい。大好き！」

「……俺も」

影がかかる。さくらは、「あ」と思って、目を閉じた。水面が静かに揺れて、吹いた風が二人の髪を撫でる。

（……キス。久しぶり）

まともに顔も見られないくらい忙しかったのだから、キスもハグも、随分と久しぶりな気がする。意識したら、途端に体中が熱くなった。

ゆつくりと、優しく触れる唇。合わさって、離れて。ちゅ、ちゅ、と響くリップ音に、さくらの頬が赤く染まる。小狼にキスをされる度に、心臓がきゅううと締め付けられて、体の芯が熱くなる。

この先に起こるだろう甘やかな予感に、頭がくらくらした。もつと触れてほしい。もつと触れたい。自分を求めてくれる小狼の表情や、零れる吐息、汗ばんだ熱い体を思い出して、急速に動悸

が増した。

（でもきつと、小狼くんも同じ事考えてる……よね？）

抱きしめる力が強くなって、さくらはぎゅつと目を瞑った。

触れるだけのキスが、すぐに深く合わさって。小狼の手が腰に回って、それから――。

「……さくら」

名前を呼ばれて、さくらは閉じていた目を開いた。キスをしてきたから当たり前だけれど、至近距離に小狼の顔があつて、ドキリと心臓が跳ねる。真っ直ぐに見つめる瞳の中に、自分の姿が映っている。今の二人を、邪魔する人はいない。

さくらは期待に胸を膨らませ、続く小狼の言葉を待った。

「まだ、コテージに案内していなかったな。ごめん。荷物はもう、偉に頼んで運び込ませてあるんだ」

「……え？ あ、うん。そ、そうだったね」

「海で遊ぶのはいつだって出来る。五日もあるんだしな。先に、コテージと島を案内するから」

さくらは拍子抜けをした。小狼は通常のモードに戻っていて、その瞳の中にも、さくらが予感していた情欲の欠片も見えない。その手は、ただただ優しく紳士的だ。

海から上がってコテージへの道を案内されている間、さくらは自己嫌悪と羞恥で死にそうになっていた。先を歩く小狼の背中を見つめて、泣きそうになる。

(私ってば、一人ではしたないコト、考えてた……。小狼くんは、全然普通なのに。恥ずかしいよお)

そうだ。まだ島に着いたばかりで、二人の時間はたつぷりある。急いだり焦ったりしなくてもいいんだ。

さくらは両頬を手で覆って、熱の余韻を追い出そうと頑張った。今も本当は、小狼の背中に抱き着いてしまいたい。でも、我慢した。どうしてそうするのか、自分でもわからないけれど。

(小狼くんがせつかく連れてきてくれたんだもん。小狼くんがしたい事に、私も倣いたい)

だけど。さくらはこの時、まだわかっていなかった。

小狼が用意したこの五日間の休暇が、とんでもない計画を秘めていた事に。

案内されたコテージは、二人用にしてはかなり広く豪華だった。

ジェット機が降り立ったエアポートとは、雰囲気が違う。自然の中に溶け込む素朴な外観からは想像できない。高い天井と広々とした空間に、さくらは目を瞠った。二十帖近くあると思われるダイニングキッチンと、白で統一されたバスルームと洗面所。そして、キングサイズのベッドに圧倒される、広い寝室。

リビングを出ると小さなプールがあった。その先の柵を越えると、すぐにビーチがある。

新たな扉を開くたびに、さくらは歓喜と驚きの声を上げた。

「冷蔵庫の中に、さくらが作ったおかずと食材があると思う。荷物は寝室だ。あとで整理すればいい。足りないものがあれば、この島から船で三十分くらい行くともう一つ大きな島があって、そこで買い物出来るから。必要な時は言って」

「ええつと……。小狼くん、この島って」

「李家の所有物だ。……正確に言うと、俺の、かな。この前、買ったばかりなんだ。コテージも最近完成したばかりで」

「ええ!?!」

小狼の言葉に、さくらはさすがに驚いてしまった。自分が知らないうちに、まさか島を買っていたなんて。あまりに唐突で壮大な話だったので、さくらはしばし言葉を失った。

その反応に、小狼も居心地悪そうに目を逸らす。「自分でもここまでするつもりはなかったんだ」と、ぽつりと零れた言葉。残念

ながら、さくらの耳には届かなかった。

「じゃあ、この島には他の人は……」

「いない。完全な二人つきりだ」

「ほええええ」

さくらはそこまで聞くと、体から力が抜けたように、ソファへと腰を下ろした。小狼はその隣に座って、さくらの顔を覗き込む。

「不便がないように手配はした。だけど、食事の用意だけは自分達でするしかないんだ。……俺も、勿論手伝うけど。そこだけは、さくらに負担かける事になる。ごめんな」

「えっ……！ な、なんで謝るの？ さくらは小狼くんの奥さんなんだよ？ 小狼くんに美味しいご飯を作るのは、さくらがしたい事でもあるの！」

身を乗り出してさくらがそう言うと、小狼は両目をぱちぱちと瞬かせたあと、ふ、と破顔した。嬉しそうにはにかむその顔は、幼い日と変わらない。さくらは、ドキドキと鳴る自分の心臓の音を、意識した。

「……うん。俺も、さくらのご飯が食べたい。ずっと食べたくて、禁断症状になりそうだった」

「あつ。じゃあ、今すぐ食べよ？ 用意するから！」

さくらは張り切ってソファから立ち上がると、冷蔵庫から作り置きのおかずを取り出した。皿に移し替えてあたためなおし、テーブルに並べる。

小狼は、さくらの様子を愛おしそうに見つめていた。エプロンを付けて、パタパタと動きまわる。小狼の為に食事を用意して、毎晩待っていてくれた。一人にさせた夜を思うと、小狼の胸も痛んだ。

「はい、どうぞ！ 召し上がれ」

「いただきます」

だけど今、二人は一緒にいる。同じ食卓で向かい合って、さくらの笑顔を見ながらあたたかな手料理を味わえる幸福感を、小狼はこれでもかと言うくらいに感じていた。

そしてそれは、さくらも同じで。

美味しいね、と言いつつあいながら、二人は久しぶりに食卓を囲めた事を喜ぶのだった。

それから。荷解きをしてから島を一周散歩した。島の大きさは、友枝中学校と同じくらい敷地面積じゃないかと、小狼は言った。しかし、実際に歩いてみるとそれ以上に広く感じた。自然のもの以外なものないから、そう感じるのかもしれない。

夕陽が沈むのを見て、日が暮れる前にとコテージに帰った。それから二人で夕食を作って、満腹になるくらいに食べて、後片付けをして。

そこまで来ると、さくらは妙に緊張してきた。いよいよだ、と。期待と緊張で胸がドキドキとうるさくなる。

「さくら。シャワー先に浴びるか？」

「あつ、えつ、えつと……!! 小狼くん、先にどうぞ！」

「わかった」

さくらが動揺しているのは、小狼に充分伝わっている筈だ。それは恥ずかしくもあったけれど、長年の付き合いから安心していうのもあった。きっと今日は、うんと優しく抱きしめてくれる。長く触れあえなかった寂しさを埋めるように、めいっぱい愛してくれる。

考えるだけで、逆上せそうになった。

温めのシャワーを頭から浴びながら、さくらは自分の体を抱きしめた。

いつもよりも念入りに、丁寧に洗って、その分時間がかかってしまった。シャワーを終えてバスルームを出ると、小狼が目の前

にいたから驚いた。

「逆上せたんじゃないかって、心配した。大丈夫か？」

「うん……えへへ。お見通しだね」

少しくらしたらけれど、大丈夫と言って笑った。差し出された小狼の手には素直に甘えて、さくらは寝室へと連れていってもらう。やわらかなベッドの上に寝転ぶと、小狼がタオルで優しくさくらの髪を拭いた。

「このまま寝ると、寝癖が酷い事になるぞ？」

「ん……」

「仕方ないな」

小狼は苦笑すると、さくらの髪を丁寧に乾かしてくれた。優しく触れるその手が愛おしくて、嬉しくて。さくらは、涙が出そうだった。

「よし、乾いた。さくら、寝たの……」

小狼の言葉が、途中で途切れる。さくらは小狼の肩に手を置いて、自分からキスをした。小狼の唇は少しだけ冷たくて、さくらの熱が移っていくようだ。小狼の手が背中に回って、ぎゅっと強く抱きしめられた。

長い時間、口づけをした。小狼から、さくらから。お互いに唇を寄せて、何度も何度も触れた。小狼の手がさくらのやわらかな髪に差し込まれ、その感触に小さく震えた。

遠くから、波の音が聞こえる。目を閉じて、さくらは思った。

——ここには、二人だけしかない。夢みたいな時間の中に、いる。

「小狼くん……好き……」

「俺もだ。さくら、好きだ……」

キスの合間に想いを告げて、更に口づけは深くなった。舌を絡め、口内をなめとられて、さくらは甘く声を零す。密着した体を擦り合わせるようにすると、頭の中も熱くなった。

——そして、違和感に気付く。

いつもならば、とつくに服を脱がされていてもおかしくない。

なのに小狼は、キスから先には進もうとしない。焦らされているのかもと思ったけれど、小狼は何も言わず、ただキスを繰り返す。

いつもと違う。キスとハグだけ。なのに、こんなに熱をあげられてしまう。

先に進まないのはどうしてなんだろう。いつもとは異なる現状への違和感。少しの不安。——そういう気持ちも、勿論あった。

だけど今は、もっとキスをしたい。もっともっと、この想いと熱を分け与えたい。そんな熱情が、さくらを動かしていた。

「……ん、ちゅ……♡しゃおらん、くん……♡」

「さくら……、もっと、キスしよう？」

「うん。……ん、ん……っ、ん♡」

波の音を聞きながら、二人は夢中でキスをした。お互いの顔を見て、キスの合間に好きの想いを伝えあつて。幸福感で満たされ

たベッドは、ひたすらに甘く染まっていく。

初日の夜は、そんな風に更けていくのだった。

翌日。目が覚めると、さくらは小狼の腕に抱かれていた。文字通り、抱きしめられながら眠ったのだ。

小狼の寝顔は穏やかで、朝の光の中、見惚れてしまうくらいに綺麗だった。いつもさくらの方が寝坊する事が多い為、こんな風に小狼の寝顔を堪能できる事は貴重だ。静かな寝息に耳を澄ませ、さくらは微笑んだ。

しかし。どうしても、不可解な事があつた。

(うーん。やっぱり、おかしい……よね?)

昨夜の事を思い出す。シャワーを浴びて、キングサイズのベッドに入つて。さくらからキスをして、小狼もそれに応えてくれた。力強く抱きしめられて、何度も何度もキスをした。幸せだった。

だけど、それだけだった。心地いい空間に瞼がとろんと落ち始めるのと、まるで幼子を寝かしつけるように、小狼の手がさくらの髪を優しく撫でた。まだ起きていたい、と我儘を言った事は覚えてる。小狼は笑うだけだった。そこから先の記憶がない、と言う事は。そのあたりで、さくらの意識は夢の中へと落ちたのだろう。久しぶりのキスとハグ。気持ちよくて、心地よくて。幸せだった。

だけど、いつもならそこから繋がる『先』が、昨夜は不自然な程になかった。小狼の手はさくらを優しく抱きしめてはくれたけれど、服を脱がしたり隠された場所を弄ったりする事はなかった。さくらは、小狼の寝顔を見つめながら、考える。

(もしかしたら、小狼くん……お仕事で疲れて、そういうコトする元気がなかったのかも。そうだ。きつと、そうだよね)

この休暇を取る為に、小狼の仕事がどれだけ大変だったのか、さくらには想像する事しか出来ない。コテージの準備や長時間の移動が、それに拍車をかけたのかもしれない。そう思うと、申し訳ない気持ちになった。

何か、返せるものはないだろうか。さくらは、真剣に考え始めた。

「うーん……、んー」

「……そんな難しい顔して、何考えてるんだ？ 朝から」

「それは、小狼くん……、って、あれ？ 小狼くん！ 起きて

たの？」

気付くと、小狼の目はぱっちり開いて、さくらを見ていた。驚いて思わず離れようと動くと、すかさず伸びた小狼の手に掴まる。すべすべとした小狼の肌に体を押し当てられて、さくらは、かあ、と頬を染めた。

「俺に、何？ ……何、考えてた？」

「……小狼くん、何かお返ししたいなって。こんな、素敵なところに連れてきてもらえたから」

「なんだ。そんな事か」

小狼はどこか安堵したように笑うと、さくらの額に自分のそれをコツンと当てた。至近距離で笑う顔が、やわらかく綻んだ目元が、さくらをドキドキさせる。

「お返しは、笑ってくれるだけでいい。さくらが嬉しそうにしてくれていけば、頑張った甲斐がある」

「でも……。私も、何かしたい。する。小狼くん、楽しみにしてて？」

こういう時は譲らない。さくらの言葉に、小狼は面食らったあと、くすくすと笑った。抱きしめる力が、強くなる。さらりと、額にかかった髪が払われて、小狼の唇がキスを落とす。

「わかった」

ちゅ、ちゅ、と。額からこめかみ、頬や瞼に、キスが落ちた。

さくらはくすぐったそうに笑って、お返しにと小狼の頬にキスを

する。お互いに小鳥が啄むようにキスを落としていたが、不意に、小狼の唇がさくらの首元に吸い付いた。

「あ……っ」

甘い声が漏れる。さくらはキャミソールワンピース一枚という軽装で、実に無防備だった。薄手のサテン生地は、小狼の掌の熱さも唇の感触も、敏感に伝える。朝の爽やかな空気が一瞬で艶やかなもの変わって、さくらは口元を手で覆った。敏感な場所に触れられているわけでもないのに、小狼に触れられていると思うだけで、体が反応している。声が、漏れてしまう。

しかし。次の瞬間、ぴたりと止まった。さくらの首元、鎖骨辺りに吸い付いていた唇の感触も、腰に回された手の温度も。すつ、と遠のいて、代わりに優しい声が落ちた。

「お腹、すいただろ？ パンでいいか？」

「……う、ん。私、やるよ？」

「じゃあ、一緒に準備しよう」

小狼はやや億劫そうに起き上がると、前髪をかき上げて「ふー」と息を吐いた。さくらは背を向けると、リビングキッチンへと歩き出す。さくらは呆然とそれを見つめ、自分もベッドを下りた。今になって、心臓が暴れ出す。

（小狼くん、どうしたんだろう？ やっぱり、疲れてるから？ ……でも。さつき、抱きしめられた時にわかっちゃった。小狼くん………も、ちゃんと反応してた、よね？）

疲労でそういう行為が出来なくなっている、という理由ではないようだ。それならば、どうしてだろう。さくらは考える。小狼の行動には、どんな意味があるのだろうか。

「……よおっし」

さくらは気合を入れるように頬を叩くと、小狼の許へと向かった。

さくらに用意されたものは、たくさんあった。

一部屋まるごとウォークインクローゼットになっていて、ワンピースやブラウス、スカートやパンツ、ドレスまで。様々なワイロロープが用意されていた。靴やバッグもお店のよう陳列されていて、さくらは目を疑った。

思わず隣にいる小狼を見ると、困った顔で目を逸らす。

「……このあたりは、姉上達に頼んだんだ。五日分でいいって言ったんだけど、どうにも伝わらなかつたらしい」

「そっか。お姉様達が……。嬉しい、けど。なんか、申し訳ないな」

「そう思うなら、使つてやつてくれ。きつと喜ぶ」

「うん！」

小狼は自分の荷物を片付けに行くからと、一人リビングへと戻つていった。

引き出しを開けると、下着やナイトドレスが用意されていた。

フューシヤピンクのレースを広げると、それはそれは刺激的な下着だった。さくらの顔が真っ赤に染まる。

「ほええええ、ぬ、布が少ないよお。こっちは……紐？」

頑張るのよ！——というエールが頭の中で響いてきて、さくらは苦笑した。小狼に見つかったら恥ずかしいので、元の位置に戻して引き出しを閉める。

「えつと……こっちの棚は、なんだろう？」

開けるのが怖いような、楽しみのような。さくらはドキドキしながら、その扉を開いた。その瞬間、フローラルな香りがして、さくらは目を瞬かせた。

「さくら。どうする？ 海に行くか……？」

三十分経つても戻つてこないの、小狼はさくらを呼びに来た。こんこん、とノックをしてから中に入ると、「ほえつ」と驚いた声が入ってきた。小狼は不思議に思いながら、部屋の奥へと足を進める。

「さくら？」

「あつ……。小狼、くん」

「——！」

小狼は驚愕の表情で、さくらの姿を凝視した。頭からつま先まで見つめたあと、カツ、と頬が赤く染まる。その反応に、さくらも照れた。

「水着も、あつたの。どうかな？」

「……………」

「小狼くん、この色好きだったから……着てみたんだけど。えつと……」

さくらは、ミントグリーンの水着を着ていた。シンプルな作りだけに、体のラインが強調される。少々際どい食い込みが恥ずかしいのか、その部分は手で隠しながら、さくらは小狼に問いかける。

色だけで選んで着てみたけれど、思ったよりも布の面積が少ない。恥ずかしくて、やっぱりやめようと思った瞬間、小狼が来て

しまったので焦った。観念して自分の姿を晒してみたが、小狼は無言のまま見つめるだけで、それがさくらの羞恥を更に煽った。

「や、やっぱりやめる！ 着替えるから、ちよつと待って……」
「着替えなくていい！」

小狼の言葉と掴まれた手の熱さに、さくらは振り返る。見ると、小狼は眉を顰めて顔を赤くして、さくらを見つめていた。

その照れ顔が、どこか懐かしい気持ちにさせた。まだ、小狼の想いに気付いていない頃。彼は何度も、こんな顔で自分を見つめていた事を、不意に思い出す。

「に、似合ってる。すごく……。いつもならそんな格好で外に出すのは嫌だけど、今は二人きりなんだ。……俺が見るだけなら、むしろ」

「嬉しい……？」

「う。い、言わせるな」

小狼の赤面が、さくらにも移る。二人はしばし真っ赤になって俯いて、繋いだ手を見つめていた。ちらりと、さくらが小狼の方を見ると、ちよつと相手もこちらを見た。照れくさそうに笑って、言う。

「じゃあ、俺も水着に着替える。ビーチの方に行くか？」

「あつ。プール！ プールがいいな。プールサイドに、休憩できる場所もあったよね？ 屋根とかソファもあるし」

「ああ。じゃあ、何かドリンクを作って持っていく。さくらは先

に行つてて」

小狼の言葉に頷いて、さくらは早速支度を始めた。日焼け止めを全身に塗ってから、髪をサイドで留める。お気に入り、星がついているピン留めは、知世が少し前にくれたものだ。

さくらは鏡の前でくるりと回ってから、照れくさそうに一人笑んだ。

そうして、水着が置いてあった場所にひっそりとあった『それ』を手にとって、ごくりと喉を鳴らした。

大きめのグラスに、ミキサーで作ったパイナップルジュースを注ぎ、パイナップルとチェリーを添えてストローをさす。二人分を持ってプールへと来た小狼は、さくらの姿が見えない事に気付いた。焦って辺りを見回すと、名前を呼ばれる。

「小狼くん！ こっちだよー」

小狼はホッと息を吐いて、さくらのいる方へと向かった。

「泳がないのか？」

てつきりプールにいたと思ったのに。さくらはプールサイドに設置された休憩スペースにいた。屋根があるので強い日差しも届かない。大きめのソファやお洒落な椅子が並んでいる。

さくらはなぜか、えへんと胸を張って言った。

「泳ぐよりも、小狼くんを癒したいなって思っ。これ。置いてあつたの。マッサージオイルなんだって！」

「マッサージオイル……？」

「そう！ 小狼くん、お仕事でお疲れでしょ？ 私に何か出来ないかなって思ってたの。これで、小狼くんの体と心をリラックスさせて、癒してあげるんだ！」

ソファにはタオルが敷いてあり、サイドテーブルにはオイルの入った小瓶があつた。さくらは準備万端で、驚く小狼の手からグラスを受け取ると、背を押してソファへと座らせた。

「……大丈夫か？」

「うん！ 少しなら肩もみとかしたことあるし、多分。オイルを使ってやるのは初めてだけど……気持ちよく出来るように、頑張るね！」

さくらの言葉に若干の不安を覚えながらも、小狼は言われた通りに、ソファの上にうつ伏せの状態で横たわった。

硝子の瓶からとろりとしたオイルを手に垂らすと、両手で擦り合わせた。独特の香りがする。少し緊張しながら、小狼の背中に手を当てて、オイルを広げるように撫でる。逞しい背中に触れて

いるうちに、妙な緊張感とヨコシマな感情が顔を出す。

さくらは自分の思考にハツとして、ふるふると首を横に振った。（私、何考えて……！ 小狼くんにリラックスしてもらうんだから、余計な事は考えないようにしないと）

オイルをたっぷりと垂らして、肩甲骨から腰のあたりまでを急にマッサージする。

小さい頃は父や兄の肩もみくらいはしていた。けれど、こんな風に本格的なマッサージは当然だけど初めてで、さくらはテレビや雑誌で見た記憶を頼りに、懸命に手を動かした。

小狼は無言だった。もしかしたら、眠ってしまったのかもしれない。リラックスさせる事が一番の目的なので、それならば嬉しいと、さくらはこっそりと笑んだ。

（ん……でも、この体勢、やりにくい。もっと力入れた方が気持ちいいよね？）

さくらは悩んだ末に、思いつく。手を止めて、小狼の顔を覗き込んだ。残念ながら、眠ってはいなかったようだ。急に覗き込んできたさくらの顔を見て、びっくりと驚いた素振りを見せる。

「ど、どうした？ 疲れたならやめてもいいぞ」

「ううん。大丈夫。あのね、もっと力入れた方が気持ちいいと思うの。だから、小狼くんの上に乗ってもいい？」

「……えっ」

「重かったら言っ。てね」

「ちよ、ちよつと待てさくら、乗るって……、っ!？」

よいしょ、と。足を広げて、小狼の腰の辺りに跨った。

オイルで滑った肌の感触が、お尻の辺りから伝わって、さくらは思わず赤面する。しかし、意識しては負けだと言いつけさせた。

背中に両手を置いて、上半身を傾けて体重をかける。

「よいしょ、よいしょ……。どう？ 小狼くん」

「……どう、って言われても……」

「気持ちいい？ もっと強い方がいい？」

「大丈夫、だ。………すごく、気持ちいい」

小狼の声はくぐもっていて、呼吸も荒いように感じた。さくらは不思議に思いながら、円を描くように両手を滑らせて、凝り固まった肩や腰の筋肉を解していく。我ながら、上手になってきたような気がする。

「……ん、……あ」

「——!？」

（ほええ。小狼くんの声、気持ちよさそう……。う、嬉しい。けど、なんか……えっちな気分になっちゃうよお）

またも覗いた邪心のせいで、手が止まりそうになった。さくらは内心で焦る。マッサージをしながらいやらしい気持ちになったなんて、小狼に気付かれたら恥ずかしい。

さくらは動揺を隠すように、目の前にあるサイドテーブルに手を伸ばした。

「も、もっとオイル多い方がいいかな!」

蓋が開いたままのガラス瓶を手に取る。しかし焦っていた事もあり、少量垂らそうと傾けたところで、瓶ごと手から滑り落ちた。大量のオイルが、小狼の背中に零れる。

「ほええええ! ご、ごめんなさい!」

瓶はそのまま床に落ちて、ころころとソファの下に転がっていった。さくらは焦って、小狼の背中のオイルを落とそうと動く。

「さくら、大丈夫だから落ち着け! 危ないぞ」

「ごめんね、今拭きとるね……! ほええっ」

「!!」

オイルで滑りのよくなった小狼の背中の上、つつつ、とさくらの手が滑った。バランスを崩した体は、小狼の上に勢いよく倒れこむ。背中に感じる重みとやわらかさに、小狼の体が一瞬で硬直した。

さくらは、かああ、と頬を真っ赤に染めた。自分の胸やお腹、下腹部までもがびったりと小狼の背面に合わさっている。

塗りたくったオイルのおかげで触れている肌と肌の感触がなんとも言えない。早く起き上がらなければ、と思うのに、触れるところ全部がつるつると滑って、気持ちだけが焦る。

「ほええ。ごめんねごめんね、小狼くん」

「大丈夫だ。……無理して動かなくて、いいから。さくら。そのまま、マッサージしてくれないか……?」

「そのまま……？ え？ ど、どうすればいいの？」

小狼の言葉に、さくらは目を瞬かせた。このままの体勢でマッサージなんて出来るのだろうか。考えが纏まらないままぐるぐるしていると、小狼が教えてくれた。

「さくらの体全体で、マッサージするんだ。動かせる範囲でいいから」

「え？ こ、こう……？」

さくらは小狼の肩に手を置くと、半信半疑のまま体を上下に動かした。オイルが、いやらしい音を立てる。肌と肌が滑って擦れ合う感覚に、さくらは戸惑う。

「は、う……ん。これで、合ってる……？」

「ああ……。これなら、さくらも一緒に気持ちよくなれる、だろ？」

「なんだか、変だよ……」

そう思うのに、動き出すと止められなくなった。ふと気づくと、小狼も自分と同じくらい呼吸が荒くなっている。小狼の背中の、骨ばった部分や筋肉質な部分が、肌を通して伝わる。逆を言えば、さくらの体のやわらかさや、飛び出しそうな心臓の鼓動も、小狼に伝わってしまったのだろうか。

「ちよつと、待って。さくら……。体勢変えるから。少し体浮かせて……。そう。落ちないように、ソファに手を置いて」

「え？ ほええ!？」

自分の下でうつ伏せになっていた小狼が、急に動いた。ぐるり

と態勢を仰向けに変えると、正面からさくらを抱きしめた。さくらの前面に塗りたくられたオイルを自分に移すように、小狼は自らも体を動かして擦り上げる。

そして、漸く気付く。

さくらのお腹の辺りに当たっている、固い感触。真っ赤な顔で小狼を見つめると、恥ずかしそうに目を伏せて、更に動きを激しくする。

ぬちゃぬちゃと響くオイルの音。擦られているだけなのに、堪らなく気持ちいい。

「あ……っ、あっ♡小狼くん、これ、だめだよ。ち、違う意味で気持ちよくて……。変な気持ちになっちゃう……。っ♡」

「俺も。すごく気持ちいい。さくらの体、やわらかくてあったかくて。ずっとこうしていたい……!」

激しい動きのせいで、さくらの胸を隠していたビキニが捲れ上がる。ツンと尖った先端が直に擦られて、さくらの声が更に甘い色に変わった。

「あっ、あああん♡だめ、だめえ♡」

「は……。っ、可愛いピンク。擦られて、気持ちいい？」

「やつ、意地悪言っちゃ、やだあ……。♡ふ、うう♡」

「俺も、同じだから……。さくら、もつとだ。もつと動いて」

もう片方のビキニも、小狼の手で捲られて、両胸の乳首が露わになった。ぬるぬるとした肌で擦られ、痺れるような刺激が堪ら

なく気持ちよかった。

小狼の勃起した陰茎が、さくらの秘部も刺激する。お互いの性感帯を、お互いの肌で擦って愛撫する。もどかしくて、焦れたい。なのに、こんなにも気持ちいい。

「小狼くん、小狼くん……っ♡」

「さくら……!」

互いに夢中になって、何度も体を擦り合った。乱れた吐息ごと、深く口づける。キスの合間に、さくらは小さく笑った。

「えへへ。ぬるぬるになっちゃった……♡」

「あとで、一緒にシャワー浴びるか？」

「うん」

お昼が近づいて、さくらのお腹が空腹を訴えるまで。二人は、存分にオイルマッサージを満喫するのだった。

そのまま深く深く潜って、キスをする。二人分の呼吸が、泡になつて上へと上がっていった。

二日目の太陽が、沈んでいく。さくらは小狼の腕に抱かれながら、心地いい水の中で漂っていた。真っ赤に染まる空を見つめながら、小狼へと言った。

「何か、理由があるの？ 小狼くんが、私と、その……え、えっち……しない、理由」

恥ずかしいくらいに夢中になったマッサージも、性交には至らず、までも不発に終わった。ここまで来ると、意識して避けているとしか思えない。だからと言って『そういうコト』事態を嫌がっているようには見えず、むしろ一緒にいる時間やくつついている時間は、普通の休日よりも遥かに多い。

さくらが思い切って問いかけると、小狼は苦笑して、はあ、と息を吐いた。抱きしめる手に、力がこもる。

「四日、我慢して。五日目に初めて性行為に及ぶ。ある地方に、そういう伝承的なものがある、らしいんだ。俺も文献で読んだだけだから、信憑性がどれくらいあるかはわからないんだが」

小狼の話は意外なもので、さくらは驚きを隠せなかった。四日間、キスやハグといった恋人同士の触れ合いをして、その間は性行為や自慰などは一切しない。五日目に、初めて愛撫や性交といった行為をする事で、今までにない快楽を味わえると言う。

呆然とするさくらに、小狼は申し訳なきそうに言った。

「ちやぶん、と水が跳ねる。」

茜色に染まるプール。さくらは、生まれたままの姿で泳いでいた。魚のように軽やかに泳ぐさくらを、小狼が捕まえる。

「……言い出せなくてごめん。俺も、迷ってたんだ。実際に、出来るかどうかもわからなかった。俺も、まだ自信ないんだ」

「……ほええ」

「こっちは必死で我慢してるのに、オイルマッサージとか言い出すから。さくらは知ってて、俺を誘惑してるのかと思った」

「えっ!? ち、違うよお!」

オイルを見つけたのは偶然で、小狼を癒したかっただけ。しかし、結果的にそういう雰囲気になってしまったのは事実で、自分にも非はある。もしかしたら小狼は、ずっと我慢していたのだろうか。ここに来てからの自分の言動を思い出して、さくらは赤面する。

動揺するさくらの頭を、小狼はぼんぼんと撫でた。

「本当なら四日間はキスやハグだけで我慢しないとダメなんだが、俺達はもう『そういう行為』に近い事をやっているからな。本来のやり方とは違うし、あまり気負わなくてもいいんだ」

「でも。小狼くんは、『それ』をしたいんだよね?」

「……そうだな」

小狼は何かを思い出しているのか、真剣な顔で考えながら、そう言った。その横顔を見て、さくらも決心する。

「じゃあ、頑張ろう! 私も、やってみたい。キスやハグだけ、っていうのは無理かもしれないけど……」

この島に来て、二日。触れあって、キスをして。今すぐにひと

つに繋がりたいという衝動は、一秒ごとに強くなっている気がする。この状態で制約を設けるのは、覚悟しているよりもずっと辛いだろう。

それでも。

「小狼くんと離れている時より、ずっと幸せだよ。だって、一緒にいられるんだもん」

「さくら……」

「いっぱいくっついて、イチャイチャして……それで、五日目は……。……楽しみに、してるね?」

夕日に照らされたさくらの笑顔に、小狼はぐっと奥歯を噛んだ。絞り出すような声で頷くと、余裕のない表情でさくらの唇を奪った。水飛沫をあげて、二人の身体は水の中へと沈んでいく。

——こうして。二人きりの離島で過ごす上での、『約束事』が出来た。

三日目は、朝からリビングでくつろいでいた。

——午前十時。

小狼の膝の上にさくらが座って、密着した状態で映画鑑賞をする事になった。しかしすぐに、内容はわからなくなる。小狼が幾度となくさくらにキスをしたがったせいで、テレビ画面よりもお互いの顔を見る事が多くなった。そのうちに物語の行方よりも、キスに夢中になってしまった。

「ふあ……♡はあ、あ、ん♡」

性交が出来ない分、キスをする事が多くなった。食事をとる時ものんびりと過ごす時も、常にくっついて過ごした。

「休暇の間は、さくらの定位置はここだから——小狼はそう言って、自分の膝にさくらを座らせた。何かをしている時も、何もしていない時も。小狼の膝の上で、小狼の腕に抱かれて、キスをして過ごすのが日常になった。

そして、キスだけでは治まらない体は、『悪戯』という名目で、互いの体を弄り合った。

「小狼くん、だめえ……っ、今、すごく敏感、なの。少し触られただけでも、イっちゃいそう……♡」

さくらの両胸の先端を、小狼の指がくにくにと捏ねる。それだけの刺激でも、焦らされ続けたさくらの身体は容易に絶頂へと昇り詰める。じわりと愛液が滲む感覚に、さくらは慌てて待ったをかけた。

「そうか……。じゃあ、ここまでにする」

小狼の指が離れて、さくらは涙を浮かべた。本当はもっと触ってほしい。痛みを感じるくらいに強く弄られたい。じんじんと痺れるような余韻が、切ない。

「さくら、ごめんな。もう少し我慢して」

「ん……、だいじょうぶ、だよ？ 小狼くんも、辛くない？」

「……っ、辛い、けど。大丈夫だ。さくらも頑張ってるんだから」キスやハグで紛らわせて、じりじりと焦れる体をなんとか落ち着かせる。それでも、時間が経つごとに、身体は敏感になっていく。少しの刺激でも感じてしまうくらいに、危うい。

——午後二時。

「は……っ、あ、さくら……！ ……いれ、たい。さくらのナカに、入りたい……！」

はち切れんばかりに猛った肉棒を、さくらのやわらかな手が包み込むように触れて。ゆっくり、上下に擦り上げる。赤い舌で鈴口をぺろぺろと舐められ、小狼の口からは吐息と共に正直な欲望が零れ落ちた。

さくらの手が、根本をきゅっと掴む。小狼は眉を顰めて、切なそうに瞳を揺らした。

「だーめ♡……がまん、だよ？ 小狼くん」

「は……っ、わかってる。……ごめん」

「私こそごめんね？ 気持ちよくしすぎちゃったかなあ……。ね？ もう少しだけ、待っててね」

ちゅ、ちゅ、と。亀頭部分に口づけられて、小狼は更に顔を顰めた。わざと煽っているんじゃないかと思うくらい、凶悪的な可愛さだ。今すぐに捕まえて、無理矢理にでも犯してしまいたくなる気持ちを、小狼は必死で抑え込んだ。

さくらは、小狼の陰茎に話しかけて、宥めるようにキスを繰り返した。

二人が決めた約束事。

それは、『自慰行為をしない事』『可能な限りくっついている事』

『絶頂に達しない事』——その三つだった。

幸福と忍耐。その両方を味わい、また試されながら、離島での三日目が過ぎていった。

四日目は、さくらの提案で外出する事にした。船の自動操縦で観光地である近隣の島へと、二人で赴いた。せっかく遠いところに来たのだから、小狼と一緒にデートをしたい。さくらの可愛らしい申し出を、小狼は少し迷ったあとに了承した。

しかし。ここでも、二人の約束事は絶対だ。街に降り立ったあとも、小狼はさくらの腰を抱き寄せて、かなり密着した状態で歩いた。常に二人きりだった離島とは違って、今は周りにたくさんの方がいる。その事が、さくらの羞恥と快感を煽って。街中だというのに、欲情してしまっている事に気付いた。

（私、今……、変な顔、してない？ 周りの人に、変に思われなかな……？ こんな、えっちなコト考えてるの、ばれたら恥ずかしいよお）

もじもじと両足を擦り合わせて、這い上がってくるような劣情を紛らわせる。小狼は気づいていないのか、周りの店を指差しては、「入るか？」と聞いてくる。さくらは何でもない風を装いながら、こくこくと頷いた。

小狼が入ろうと誘った店は、ブティック店だった。大きな建物の中に、所狭しと服やバッグが置いてある。たくさん地元民や観光客がいて、店員も忙しそうに駆けまわっていた。

「小狼くん。混んでるから、やめる？」

「いや。大丈夫だ。こういうの、さくらに似合うんじゃないか？」

小狼は、花柄のミニワンピースを手を取ってさくらに当てて見せた。そうして、可愛い、と笑う。その言葉に、さくらの顔は真っ赤になった。

小狼が、積極的に服選びに付き合ってくれるなんて珍しい。さくらは嬉しくなった。鏡の前でワンピースを合わせていると、小狼が店員の一人を捕まえて何か話していた。言葉がわからないさくらは、にこやかに話す小狼の横顔を見つめる。

やがて話を終えると、小狼はさくらの手を引いて店の奥へと進んだ。

「試着室があるから、自由に使っていていいそうさ」

「ほえ？ そうなの？ じゃあ、着てみようかな」

店の奥には、カーテンで仕切られた試着室がたくさんあった。山のように何着も服を持ち込んでいる人もいれば、買った服を着たまま出て行く人もいる。混雑の中を進んで、さくらは一番奥の使われていない試着室に入って、早速着替えを始めた。

数分後、カーテンが少しだけ開いた。顔だけ出したさくらが、外で待っていた小狼へと言った。

「小狼くん。背中ファスナー、上げてくれる？」

「ああ、わかった」

「……えっ!? きゃ……っ」

思わず飛び出した悲鳴は、小狼の掌に遮られる。人目を盗んで試着室に入り込んだ小狼は、後ろ手にカーテンを閉めた。狭い試

着室に二人で入ると、体が密着する。さくらは目だけで、小狼へと困惑を伝えた。

小狼は、「シー」とジェスチャーすると、さくらの背中へと手を伸ばしてファスナーを上にした。そのワンピースはさくらにとっても良く似合っていて、サイズもぴったりだった。小狼はさくらを正面から見たあと、耳元で「可愛い」と囁いた。嬉しさで、さくらの頬が緩む。

しかし。そのあとの小狼の行動に、またも悲鳴が出そうになった。さくらは自らの手で唇を覆って、声を塞ぎ止める。

小狼はさくらの足元にしゃがみこむと、スカートの中に手を入れて下着を下ろした。ツ、と。透明な糸を引いて、愛液が零れた。ここに来るまでに、既にはしたくない程の愛液を滲ませていたその場所は、空気に触れて敏感になる。

小狼はさくらの足の間に潜り込むと、いやらしく蜜を垂らす秘部にむしゃぶりついた。

「ひっ、ん、くっくっ!?」

強い刺激に、さくらの足がガクガクと震えた。必死に声を抑えるが、か細い悲鳴が喉の奥から漏れる。

さくらは震える手でワンピースの裾を掴み、まくり上げた。商品汚さないように、と。こんな時なのに、どこか冷静な思考が働く。

じゅる、と音を立てて吸われ、さくらは喉を反らして震えた。

(だめ、だめだめだめ……っ！ 気持ちいいよおお♡イっちゃやう、イっちゃ……っ)

「しゃおら、く、ん……っ、だめ、だよ。約束、した……でしよ？」

「……あ。そうか。でも……、さくらのエッチなジュース、もつと飲みたい……。隣で、甘い匂いをさせるさくらが悪いんだからな。……ん、ん……っ♡」

「ふあ、あ……っ♡らめ、らって、ばあ……♡」

恍惚とした表情で、さくらは舌つ足らずに吐息を漏らした。

小狼の舌がさくらのナカで暴れまわる。さくらは気づけば自らも腰を動かし、小狼へと秘部を押し付けていた。小狼の鼻先が赤く腫れた肉芽を刺激し、舌が膣内を蹂躪する。時折強く吸い付いて、いやらしい蜜をぐくぐくと飲み下す。力強く双丘を掴まれて、快感は坂を転がり落ちるように加速した。

(もう、だめえ……♡イ……ッ)

「Are you okay? —— (大丈夫ですか?)」

「「っ!?!」」

カーテン越しに話しかけられ、さくらも小狼もハツとして動きを止めた。さくらは肩で息をしながら、「オッケー」と、それだけを繰り返す。店員が離れた事を気配で察知すると、素早く着替え、人目に止まらないよう店を脱出した。件のワンピースは、小狼が『お詫びに』と買ってくれた。

絶頂の直前でおあずけにされたせいで、さくらはもう一人では歩けないくらいに疲弊していた。小狼の腕に支えられて船に乗り、どうにか島に戻ってきたが、我慢も限界を迎えようとしていた。コテージの中に入って、扉が閉まった瞬間。我慢できずに抱き着いた。お互いにお互いを抱きしめるようにして、激しく舌を絡め、深く口づける。

「もう、だめえ……。小狼くん。さくら、もう我慢できないよお」「俺もだ……。ごめん、さくら。今日は多分、寝かせてあげられない」

——四日目。

月が空高く上った夜。二人はやわらかなベッドに雪崩れ込む。予定より早めに『約束事』を切り上げて、最後の夜へと滑り込んだ。

一糸まとわぬ、生まれたままの姿で、二人はベッドの上で抱き合った。こんなにたくさんキスをしているのに、全然足りない。疼く心と体が、一心に目の前の人を求めている。目を開けたまま、長い長いキスを繰り返したあと、熱っぽく見つめ合う。

天窓には、三日月が浮かんでいた。小狼の肩越しにそれを見つめるさくらの、翡翠の瞳に涙が滲んだ。

「小狼くん……好き。大好き」

「俺も、さくらが大好きだ……」

強く抱きしめて、キスをして。想いを伝えあった二人は、一つに繋がる事を何よりも望んでいた。

四日間、離れずに過ごした。小狼はさくらだけを、さくらは小狼だけを見つめて、想っただけの数日間が、どれだけ幸福だったか。どんな言葉でも言い尽くせない。ただ、好きで。愛おしくて。互いの存在なくては生きられないと、再確認させられた。

そして。散々に焦らされて熱を持って余した体が、触れあう。小狼は余裕のない表情で、さくらへと言った。

「……挿れるぞ」

「うん……っ」

さくらは頷いた。受け入れる準備は、充分に出来ていた。数日間かけて、愛され焦らされた体は、この瞬間をずっと待っていた。それは小狼も同じで、今にも爆発しそうな程に滾った欲望を、さくらの膣内へとゆっくりと埋め込む。

——それは、全く初めての快感だった。

「……!?!」

「……っ、さくら、ナカ……う、あ……! すごい……!」

「イ、って……る♡私、イっちゃ……っ、あ、あ、あ♡」

さくらの膣肉を抉りながら、奥までいっぱい小狼の欲望が埋め込まれた。膣内が痙攣しているような締め付けを起こし、小狼は奥歯を噛んだ。結合部からは白く濁った愛液が噴き出し、さくらは焦点の合わない瞳で小刻みに震えていた。

挿入しただけで、わかる。今までにない強い快感に、二人の思考は溶かされた。縫るように手を伸ばし、酸素を求めるようにキスをした。

「あ……っ♡だめ、だめ……、またイク……っ♡あ、ああ♡」

「すごい。まだ、動いてない、のに。さくらのナカ、ずっと俺を締め付けてる……」

「だって、小狼くん、の、おち○ちん、ずっと、欲しくて……♡嬉しくて、イっちゃうの止まらないよお♡」

「あ……っ、また、イってる。すず、い……！ さくら……♡」
しばらくは動かないまま、終わらない快感に打ち震えた。さくらの締め付けに小狼も耐えられず、膣内射精する。注がれる精の熱さに、さくらはまた絶頂に震え、追いかけてこのような快感が続いた。

「は……っ、はっ、あ。少し、動くから……！」

「……あ♡ふあ!? ああああ——!!」

小狼はさくらの両足を担ぎあげると、腰を引いて、ゆっくりと最奥を突いた。どちゅっ、という衝撃とともに、鈴口が開いた子宮口を突き上げた。その一突きで、さくらは大量の潮を噴き、意識を飛ばした。

小狼はさくらの尻尾を形が変わるほどに揉み上げながら、ゆっくりとしたペースで、奥を突いた。ぱちゅん!ぱちゅん!と、皮膚がぶつかり合う音と、愛液が混ざる音が響く。

(はう、今、私……? 気持ち、よすぎて……、飛んじやった……?)

「す、ごい……。イくの、止まらない……」

「あ、あう♡さくら、おかしくなっちゃう……♡ああん♡」
何度目か分からない絶頂に、さくらは笑った。頭がふわふわして、小狼の事しか考えられない。

ふわりと抱き上げられて、視界が変わる。「休暇の間は、さくらの定位置はここな」——そう言われて運ばれたのは、小狼の膝

の上。抱っこされる形で、さくらの体はゆるやかに揺さぶられる。

「あ♡あっ♡小狼くん♡小狼くん♡♡」

「さくら……♡キス、して。……ん、」

「ん♡ん♡ああ、あっ♡」

激しく動いているわけでもないのに、絶頂感が止まらない。

さくらの髪は小狼の揺さぶりで踊るように舞って、小さな胸がふるふると震えた。ピンク色の先端を小狼の舌が捕まえて、口の中で転がされる。その快感が、更に膣内の締め付けを強くした。さくらが身を固くし、小刻みに震える。これで、何度目の絶頂だろう。

くたりと力なく倒れる体を抱いて、小狼は再びさくらをベッドへと組み敷いた。

「さくら……、好きだ。……愛してる」

耳元で囁かれた言葉に、さくらは涙を零した。

汗や愛液でぐっしりと濡れたシーツの上で、さくらは小狼の肉棒に犯され続けた。何度となく精液を注がれ、子宮がなみなみに満たされる。それでも昂ぶりは治まらず、夜中になっても二人の交わりは続いた。

「小狼くん、もう、だめえ♡さくらのお腹、小狼くんの赤ちゃんの種でいっぱい、だよお……っ♡」

「うん。でも、まだ足りない」

「うそお! もう、無理……んっ♡」

可愛く抗議するさくらの唇を塞いで、陰茎の先でさくらの秘部をぬるぬると擦った。それだけの刺激でも、さくらは大人しくなる。ぬぷぷ、と容易に猛った肉棒を受け入れ、言葉とは裏腹に体は悦びの蜜を溢れさせた。

ゆっくりと腰を引いて、最奥まで押し入れる。小狼はだんだんと挿入のスピードをあげながら、さくらの髪に指を差し入れ、逃がさないように口づける。さくらは息も絶え絶えになりながら、小狼の腰に両足を絡めた。

「ふあ♡あ♡また、いっぱい♡だめえ、もう溢れちゃう……♡
赤ちゃん、出来ちゃうよお♡」

「今更……。なんの為に、この休暇を計画したと思ってるんだ？」

「ほえ？ 小狼くん、何……、はうんっ♡」

一際激しく最奥を突きあげられ、さくらは堪らず喘いだ。小狼はさくらの耳に甘く歯を立てながら、内緒話のように小さく囁いた。

「さくらが、欲しいって言ったんだろ？ ……俺とお前の、赤ちゃん」

「……!!」

物語のはじまりは、さくらからの、こんな一言。

「あのね、小狼くん。私……、小狼くんとの赤ちゃん、欲しいな……」

ある夜の情事のあと、小狼の腕に抱かれながらさくらは言った。眠たいのか、とろんと蕩けそうな瞳で小狼を見つめて、ふにやりと少女のような幼い笑顔を浮かべて。

それが、夢うつつの願いごとだったのか、本心からの言葉だったのか。確かめる必要もなかった。

さくらの願いを叶えてあげたい。そしてそれは同時に、小狼自身の願いに他ならなかった。

「いろんな文献を読んで、計画した。それで、この方法を思いついたんだ。さくらの周期は把握してる。今日が一番の『当たり』の筈だ。……誰にも邪魔されない場所で、一番気持ちいい状態での種付けセックス。効果があるかどうかは、あとのお楽しみだけどな……!!」

「ひやあああんっ♡や、激しい……♡だめえ、気持ちよくて、しんじやうよお……っ！ さくら、いつちやう……っ♡ふあああ
ああ♡♡」

「俺も……っ、また、イク……！ さくら……っ！」

「反らしたさくらの細い首筋に、小狼は咬みつく様にキスをした。腰を掴んで体を密着させ、決して離れないようにと口づけながら、深く深く繋がる。

びゆくびゆくと勢いよく放たれた精液が、子宮口から直接注がれていく。その感覚に、さくらはこれ以上ないくらいの幸福と快感で満たされていった。

「あー……♡あ——……♡♡いっぱい、でてりゅ……♡しやおらんくん、さくらもっといっぱい欲しい……♡小狼くんの赤ちゃんの種、もっど、くだしやい……♡♡」

快感に身を委ねたさくらは、幼い子供に戻ったように、小狼へと手を伸ばす。小狼は笑って、何度でもさくらの願いに応えるのだった。

朝方になって、二人は気を失うようにして眠りについた。

窓から入ってくる涼やかな風が、二人の髪を揺らす。燦燦と降り注ぐ陽光を反射して、海がキラキラと光った。

聞こえるさざ波に、さくらは微笑む。小狼の腕の中で身じろぎすると、また深い眠りへと入っていった。

この夢のような五日間を思い出すたび、耳の奥にさざ波が蘇る。二人の願いが叶った時も、きっと——。

Wish
♡♡
With
Love



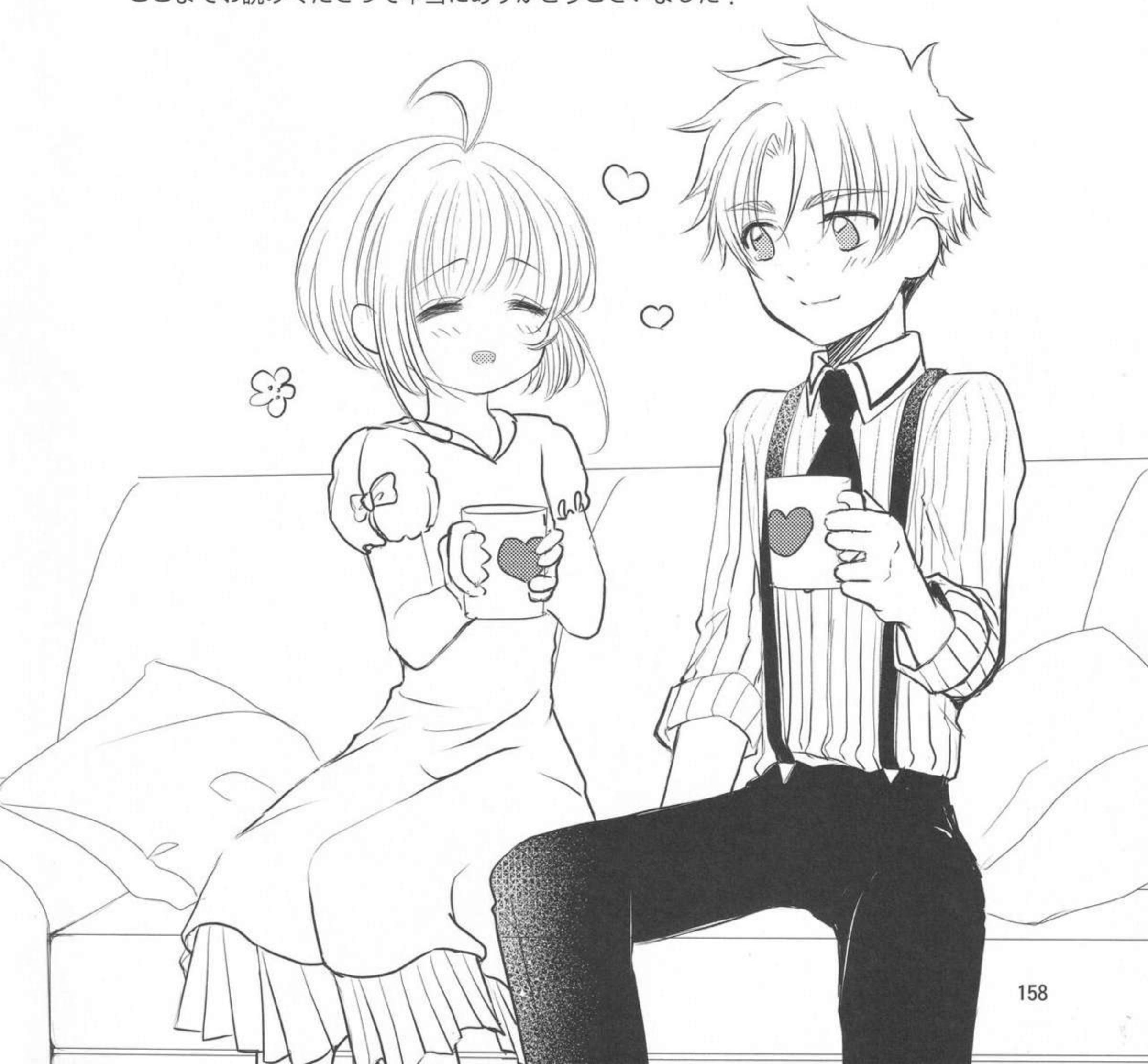
ゆまこ

なんかすごいことになってる...?!!

やばい本を作ってしまったと一番びっくりしてるゆまこです。

「R18のしゃおさが欲しい」というお話になった時、自分では描けないけれども「ポリネシアンセックス」なるものがありまして、なんてお話をさごさんにしたのが1年ぐらい前。それからあれよあれよと今夏に至り、装丁もデザインも内容までもこんなに凝った本が出来上がって震えています。

私自身、男女CPでR18描くのが実は初めてでえっちな成分はさごさんとはちみつさんに任せっきりになってしまった感が拭えないので次の機会にはもっとえっちにしゃおさを描けたらと思います。ここまでお読みくださって本当にありがとうございました！



かえでさご

令和元年に入って 初のえっちなしゃおさ本！！(笑)

とうもさごです。ちょうど一年前の作業配信で「全裸の小狼とさくらちゃんを描きたい〜」といつものように妄想を呟いたらゆまこさんが「じゃあ一緒にポリセク描く？w」と提案してきたんでこの合同誌企画のきっかけとなりました。gdgd過ぎて発想から形になるまで丸一年掛かりましたがwでもただの妄想がこんな素敵な形になる日があるなんて、声を掛けたゆまこさんとゲストのはちみつさんとずっと応援してくださったフォロワーさんの皆に感謝しますー！

小狼xさくらのR18同人誌って本当に希少な存在ですね...


一冊でも多くえっちなしゃおさ本をこの世生み出すためにこれからもしゃおさ創作を頑張り続けたいと思います！


えっちなしゃおさ本もっと増えろ~~~~！(願い)

匿名感想

フォーム↓



 salovesy

 id=146091

はちみつ 遊

「好きな人とは♡♡したい」 祝！発行！！

はちみつ遊です。

小狼xさくらR18合同誌、この素晴らしい本にゲストとしてお誘い頂いたのは、去年の夏頃でした。あれから一年と少し、遂に発行ですね！めでたいー！

スロセクとポリセクをテーマに書かせていただきました！とても楽しかったです。

蜜月のしおりというタイトルですが、英語にするとハニームーンマーカー=はちみつ酒飲んで子作り(検査薬)！……という爆萌え解釈もありがとうございます！無意識だった(笑)

蜜月のレイアウトが二重線なのは検査薬の陽性反応らしいので、めでたくご懐妊ですね♡
神編集ありがとうございます！

私にとってはご褒美でしかなかった特別企画でした！！

扉絵やコミカライズで具現化していただいて感涙です。宝物になりました。絵描きさんは魔法使い……！

ゆまこさんとさごさんの作品が素晴らしすぎて、後世に語り継ぎたい(?)それくらいに素晴らしい本です！えっちなしゃおさは最高だ！

参加できたこと、本当に嬉しいです。ありがとうございました！

お手にとっていただいた皆さんにも楽しんでいただけますよう(*´▽`*)



kimiful_honey



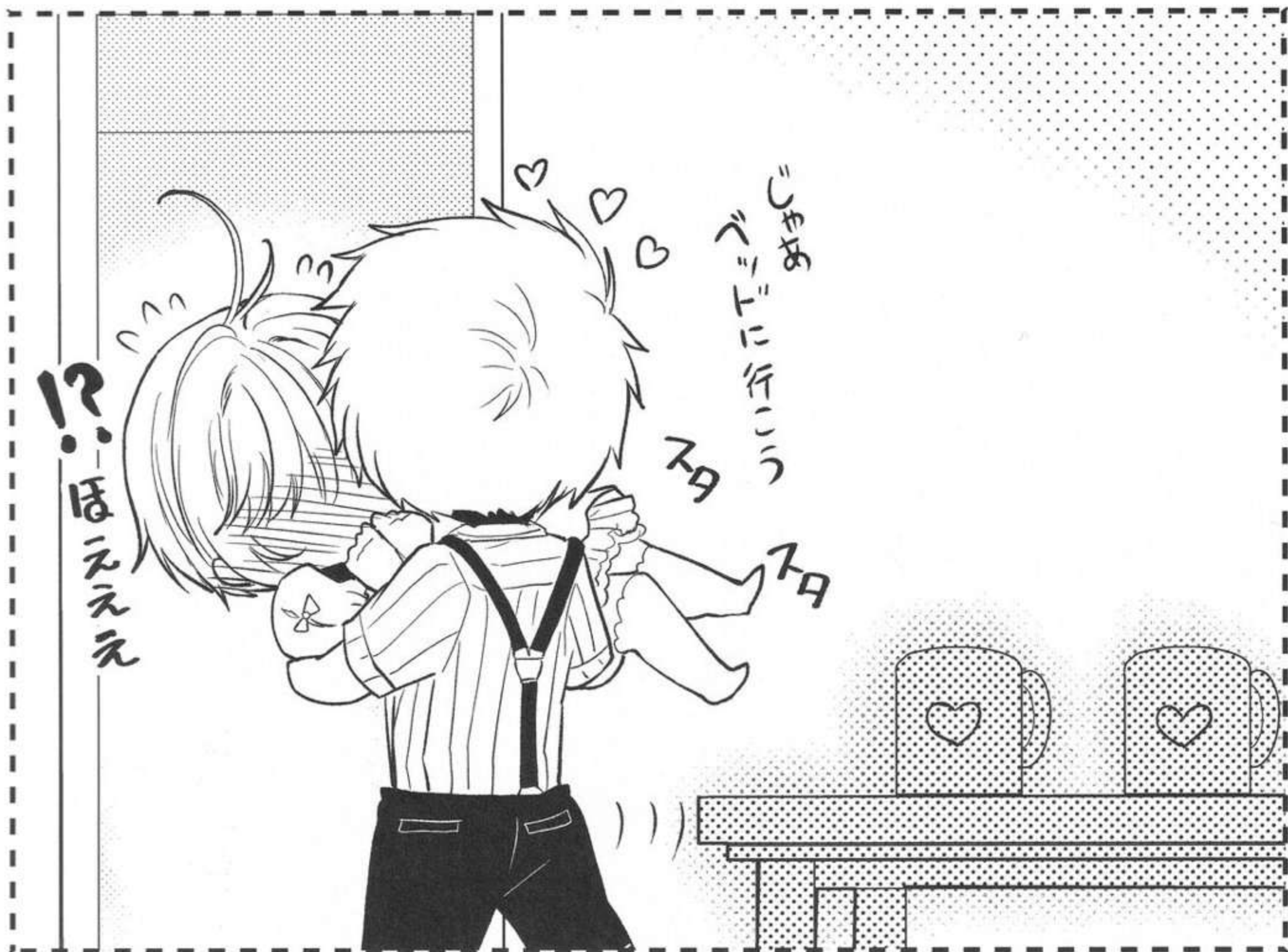
kimifulu@yahoo.co.jp



cc さくら小説サイト [君に降る桜]

<http://kiminifuluhana.web.fc2.com/>





好きな人とは♡♡したい

発行日

2019.8.10

発行

黙。/ゆまこ

印刷

(株)日光企画



マッシュマロQRコードです
感想頂けると嬉しい!

yumakanako@hotmail.co.jp



Twitter:ymknk



Pixiv:1885816

BOOTH通販のご利用ありがとうございました。

以下を同封しておりますのでご確認ください。

万が一、不足のある場合はその内容とご注文番号(6805745)を添えて

Twitter@ymknkかyumakanako@hotmail.co.jpまでご連絡ください。

恋の魔法

眠り姫に目覚めのキスを

黙。WEB再録集 恋文

平常心のコツ

おもいびととためらい

三秒間の恋

浮橋と遠雷

好きな人とは♡♡したい

ノベルティセット

(バツダ・コミカライズ冊子・しおり・ポストカ)

お楽しみいただけましたら幸いです。

ゆまこ

感想などありましたら右のQRコードの
マシュマロから頂けると嬉しいです。





好きな人とは



したい

小狼 x さくら ♥ R18 合同誌

Wish ♥♥ With Lover

CARDCAPTOR SAKURA
SYAORAN x SAKURA
UNOFFICIAL FAN BOOK
IN 2019 Summer

